女子國文

巻六

4b
810
大7

42152

教科書文庫

4
810
42-1918
20000
81506

資料室

46
810
大7

大正二年七月四日 文部省檢定濟 高等女學校國語科教科書用

文學博士芳賀矢一編

女子國文

東京 冨山房發兌

広島大学
教
81506
図書

女子國文卷六

目次

一 讀書の好時機……一
二 書齋（自修文）……四
三 禁庭の野分……八
四 蘇武（韻文）……一一
五 覺悟……一七
六 埴生の小家……一九
七 妹の病氣の模樣を祖父に報ず（書簡文）……二七

八　蟲の聲……三〇
九　修身要領（自修文）……三三
一〇　樺太境界劃定行……三八
一一　母の形見……四五
一二　秋冬の歌（韻文）……四九
一三　主人が旅行先にて世話になりし人へ（書簡文）……五一
一四　勤　勞……五二
一五　ユーゴの母……五七
一六　淑女とは何ぞ……六四
一七　本多重次……七一

一八　奥の細道……七七
一九　秋冬の句（韻文）……八四
二〇　和宮内親王の御婦德　其の一……八八
二一　和宮内親王の御婦德　其の二……九二
二二　保　險……九九
二三　播州の老婆……一〇二
二四　女流の俳諧……一〇四
二五　手紙二章（書簡文）……一〇八
二六　手紙を書く心得（自修文）……一一三
二七　高山の眺望（韻文）……一一五

二八　潮まつ間……一一九
二九　世界の歌枕……一三一
三〇　旭日旗下の人種　其の一（自修文）……一三四
三一　旭日旗下の人種　其の二（自修文）……一四〇
三二　諺と道徳……一四五
三三　日本の婦人と歐米の婦人……一五三

目次終

女子國文卷六

概說

一　讀書の好時機

澤柳政太郎

讀書は如何なる時に於てすべきか。如何なる時が最もよく讀書に適するか。これ實に重大なる問題なり。之を概說すれば、讀書せんと欲する意志起り、且讀書し得べき時間ある時は、これ即ち讀書に適したる時なり。若し讀書の意志起らず、精神疲勞して注意力微弱なる時は、たとひ十分の時間ありとも、寧ろ斷然讀書を廢して、他の業を執るに如かず。精神

好機得難くして失ひ易し

表白

(一)和蘭の博言學士(西暦一七四六―一八二〇)

勇みて快活なる時は、たとひ少時の間なりとも、讀書に甚だ益あり。故に若し五分間なりとも、十分間なりとも、かくの如き時あらば、必ず讀書すべし。

凡そ好機は得難くして失ひ易し。注意して失ふ可からず。世人動もすれば曰く「繁劇にして讀書の時間なし。」と。これ自ら怠惰なるを表白せるものなり。自ら好機を空過せる愚を露出するものなり。苟も讀書せんと欲して、而して其の時間を得ざる者は、未だこれあらざるなり。ウィテンバッハ(一)嘗て其の經驗によりて曰く、「如何なる業務、如何なる位置たりとも、讀書せんと欲する志ある者には、必ず其の時間の與へらるゝものなり。」と。蓋し讀書の時間なしといふ者は、讀書する意志なしといふに異ならざるなり。語に曰く、「學ぶに暇なしといふ者は、たとひ暇ありとも學ばざるなり。」と。

傾注

定時

讀書するに方りては、心志をして全く他事を顧ず、讀書に傾注せしめざるべからず。若し書を讀むに方り、精神を餘事に勞するが如きことあらば、啻に讀書の効なきのみならず、幾分かの害を生ずることあるべし。かくの如きは、寧ろ初より讀書せざるをよしとす。而して十分の時間を讀書に充つるを得る者は、毎日讀書の時間を一定し、此の間は必ず讀書する規則を設くること、實に讀書上の良法なりとす。此の事たる、甚だ行ひ易からざるが如くなれども、若し努めて數日間これを實行する時は、遂に其の習慣をなし、恰も定時に食

を取り、茶を呼ぶが如き習慣をなすべし。讀書の習慣は最も努めて養成すべきなり。

——讀書法——

をり〳〵にあそぶ暇はある人の
いとまなしとて書よまぬかな　本居宣長

書よむをたゞむづかしき事のみと
おもふは讀まぬ故にこそあれ　同

自修文

二　書　齋

井上哲次郎

書齋は出來得べきだけ清淨にし、且之を神聖に保たなければなりません。朝に夕に、或は書き或は讀むことを爲す所でありますから、書册、筆墨の類の縱横散亂することは免れないのでありますが、出來得べきだけ筆墨、紙册等悉く其の處を得て能く整頓するやうに努め、亂雜を戒むべきことであります。殊に有形無形の不淨を避けることが必要であります。それといふのは、書齋の主人公に取つては、其の頭腦の次であります。否むしろ書齋は頭腦の反射であります。書齋の狀態如何は、其の主人公の精神狀態の如何を現して居るものであります。書齋を亂雜蕪雜ならしめて一向平氣で居ると云ふやうなことならば、やはり其の人の精神狀態が、さういふ有樣であるのでありますが。精神狀態が亂雜複雜に堪へることが出來ず、悉く正確に、悉く純潔ならしめようといふ穎敏な批評的觀念を以て滿されて居りますれば、其の書齋の狀態も之に

頭腦の反射　其の人の心意の表示といふ意。

蕪雜　雜草のやうにみだら。

相應するやうになつて來るといふのは、必然の結果であります。また其の書齋の中に如何なる書類が陳列してあるか、其の愛讀して居る書類は如何なる性質のものであるか、高尚であるか、野卑であるか。若し極めて野卑な小說及び其の他蕪雜な雜書類であれば、やはり其の主人公の嗜好が極めて野卑であり、蕪雜であることを現して居る。若し又其の書類が哲學、宗教、文學、科學など高尚な方面のものでありますれば、其の主人公がさういふ嗜好を有つて居るに相違ありません。それで書齋の中の有樣によつて、主人公の性質が分る譯であります。書齋の有樣は主人公の精神の反射であります。それですから、主人公の頭腦の中即ち精神が純潔でなければならぬやうに、書齋も亦純潔でなければなりません。純潔で且整頓された書齋の

座右　手近。

世故　世の中のいろいろの事。

達觀　物事の先の先まで、ひろく見通すこと。

中に於てのみ、眞に趣味あり、秩序ある讀書はなし得られるのであります。書齋の中には平生最も愛讀する書類、及び書類講讀に缺くべからざる字書類の如きも、座右に備へて置かなければならぬのでありますが、又古今と云はず東西と云はず、其の最も敬慕して居る偉人、傑士、もしくは聖人の肖像又は筆蹟等を壁間に掛けて、朝に夕に親しく之に接すると云ふことも、なか〳〵趣味あるものであります。まだ年の若いうちは、書畫に就いて、さ程の趣味を生ずるものではありませんが、漸く經驗を積み、世故に長けて、人事を達觀した後、古人の書畫を壁間に掛けて之を眺める時は、一種謂ふべからざる趣味を生ずるものであります。若し又廣大な書齋でありますれば、世界の地圖若しくは日本の地圖等を掛けるのも甚だ有益であります。

かくの如く多く書籍を集め、又書籍を清潔にし、古人の肖像筆蹟等を掲げて裝飾した以上は、愈以て其の主人公の頭腦を象どる譯であります。そこに至りますと、書齋は愈貴重のものとなつて來まして、自我と書齋とは決して離るべからざる關係を生じて來るのであります。

自我　自分。

三　禁庭の野分（昭憲皇太后御作）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、にはかにかき曇り、夕星の光も見えず。とかくする程に雨いたく降出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに、聞きわかぬまでになりぬ。閨に入るころは、なほ雨の音のみ聞えしを、夜ふかくなるまゝに、

朝露のひるまはさしもなかりし空

いかづちさへ鳴りはたゝきて、夢うつゝとも思ひ定めぬに、ひまなく稲妻のきらめきわたる、いとけうとし。曉がたには雨はをやみぬれど、風はげしう吹出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目もあはず。

鳴りはたゝく

けうとし

上には民のためとて、畏くも遠きさかひにいでましたる程なれば、いかなる行宮にまし〳〵て、此の風の音に御心をなやまし給ふらん。皇太后の宮には、いかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひつゞくる程に、夜もふけぬれど、いまだ風靜まらで、いづこもおろしこめたる、いとものむづかし。

(一)明治十四年明治天皇東北御巡幸。

(二)英照皇太后。

ものむづかし

軒ちかき栗の枝の、むすべる實ながら吹折らるゝ音いと

はげしく、御階のもとのばせをも、筒井の傍なる柳も、皆をれふしぬ。今をさかりなりし眞萩も、名殘なく散亂れたる、いとさびしく見ゆ。

宮のうちだにかく荒れぬるを、ましてあやしげなる賤が家居などは、たふれぬるも多からんなど、思ひやればすゞろに悲し。

おしなべて

おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稻も、ふきそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

しなとの神

國のためしなとの神も心して

吹かなん

いなばの上はよきて吹かなん

なほとやかくやと胸をいたむる程に、いつとなく靜まり

新體詩

て、日影まばゆく雲間にさしいでぬるに、おのづから人の心もおちゐにけり。

おちゐる

四　蘇武

坪内雄藏

風颯々の秋ふけて、

節旄かろく、命おもし。

千里萬里の路越えて、

深く匈奴の國に入る。

節旄

野邊の草木や、鳥の聲、

聞く物の音も、見る色も、

いづれか夷の物ならぬ。

夷の物

（一）支那北方に威を振ひし夷族。土耳古種族に屬し常に漢の大患をなせり。

老の寢覺

思へば遠く來つるかな。
流れゆく水音たてゝ、
胸にうれひの波たかし。
故郷母あり、雁鳴きて、
老の寢覺やいかならん。
よしや幾夜の草まくら、
旅寢の空に果てぬとも、
國家のために盡すべし。
君命おもく、身はかろし。
かうと覺悟は定まりぬ。
使命つぶさに傳へつゝ、

挺身

匈奴の王に面接し、
蘇武は國書を呈しけり。
固より非道の王なれば、
國書の旨意は聽かざれど、
挺身敵地に使せし
蘇武が勇氣を惜しみつゝ、
或時蘇武を召しよせて、
「降り仕へよ。しかあらば、
おもく汝をもちひん。」と、
とき諭せども聽かざれば、
國王大いにいかりをなし、

幽閉

蘇武をとらへて荒山の
岩窖の中に幽閉し、
食を與へず、くるしめぬ。
頃しも北風雪を吹き、
寒さ膚をつんざけり。

料

飢うれば氈毛を雪に和し、
いのちを繋ぐ料となす。
日數經れども死なざれば、
えびす等怪しみ、かつ怖れ、
此度は蘇武を野に移し、
羊のむれをば守らせて、

無念

秋ももなか

「雄羊孕むことあらば、
放免せん。」とあざけりぬ。
覺悟はしても無念さに、
眠られぬ夜もいく度か。」
ひと夜雲なく月すみて、
秋ももなかの空のいろ、
せめてはかくてある事をと、
雁に託せし筆の跡。
かくて春去り、夏きたり、
また秋の風、冬の霜、
落葉々々のかさなりて、

十有九年ゆめの間や。
老いて屈せぬ忠節を、
天助けてか、不思議にも、
雁の使のかひありて、
たのしき便ぞ聞えける。
國と國との和議成りて、
蘇武は赦され歸りしに、
立出でし時の黑髮は、
いつしか雪とぞなれりける。

——國語讀本——

狼狽して度を失ふ

炷

斥候

(一)駿河の國守。永祿二年(一五五九)尾張に攻入り、織田信長に敗れて戰死す。年四十二。

五　覺悟

安積信

覺悟ある人は事變に臨みて驚かず。覺悟なき人は狼狽して度を失ふなり。一點の火にても思ひよらざる時手に當れば、驚きて色を變ず。大の灸にても覺悟して炷すれば、驚くことなし。古人の書を讀み、人物の得失を辨じ、治亂興廢の跡を觀るは、皆我が覺悟すべき工夫の爲なり。道に古今無く、理に內外なし。事跡は同じからずといふとも、道理は一に歸するなり。

今川義元(一)、戰場にて何某を召し、斥候に遣はしき。先陣の戰既に始りし所なれば、逃れ難くて槍を交へ、首一級を得て歸りぬ。義元大いに怒り、「敵勢を覘ひ速に歸るべしと命ぜしに、

おのが功を貪りて、使命を餘所にす。忠義の心無し。軍法に行ふべし。」といふ。かの士萎れたる體にて、側の人に向ひ、低聲にて、

刈萱に身にしむ色は無けれども
見すてがたきは露の下折

と、家隆の歌を唱へしかば、義元益〻怒り、「何と言ふ。」とありしに、侍臣其の事を告げ、しかば、しばらく沈吟して忽ち怒色を霽し、「屈かざる事なれども、急猝の間に家隆の歌を思ひ出し〻こと名譽なり。」とて、罪を赦されたり。

此の人の急猝の間に古歌を引き志を述べしは、覺悟ある所爲なり。(二)立花龍虎齋常に息女に敎へ給ひしは、「女なりとも

沈吟
急猝の間
(二)名は宗茂。寛永十九年(一三〇二)歿。

士の妻たる者が、事ある座に居合せたる時、取亂したる體あらんは見苦しきものなり。さやうの時は、かゝる座に居合せたること、誠に冥加の事かなとまづ思ふべし。さて其の後に如何樣とも相應に取計らふべし。如何なる事にも顚動するゆゑ、取亂したる體もあるなり。」と敎へられきとぞ。意味深き名言なり。

冥加
顚動

六　埴生の小家

岸上質軒

かねて期しつる事ながら、昨日まで綾羅錦繡を纏ひし身を、荒栲衣に着更へしのみか、水汲み、薪樵る業も、助くるは只一人の老僕のみ。山風寒き埴生の小家に、良人につかへ、子を

綾羅錦繡
荒栲衣
埴生

熒たる孤燈

はぐくみ、炊ぎ、濯ぎに日を暮しつ。夜は熒たる孤燈のもとに、麻紡み、絲繰りてふかすも多く、よその見る目は厭はしけれど、更に厭はしげなる氣色もなく、まめ〳〵しく勞き勤めて、ひたすら良人を慰めけるが、生先ながき稚兒たちの、賤が子等と遊びつれて餘念なげなるさまを見ては、さすがに優しき母心の、「あはれ由緒ある武士の兒と生れながら、一生を花さかぬ埋木となしおほせて、賤山がつ等とひとしなみに朽ちはてさせんことの、いかにも悲しき極みにこそ。」と、人知れず歎かれて、ひそかに手織布子のせまき袂を濕しけんも幾たびぞ。

賤山がつひとしなみ

手織布子

稚き兄弟は以前の榮華を忘れ果てゝ、獵師、樵の子等に馴れむつみて、母が苦心を知るよしもなく、日々に野山に遊びくらし、見やう見まねに兎逐ひ、柴こる業さへまねびつつ、互に伴とし往きかふ程に、あたりの兒等は、山刀、鍬、鎌の外、見慣れぬ眼に貴重なる具足、調度など見出でて、權次、太作の親々に歸りてかくと物語れば、物識めきたる老人どもは、「さてこそ彼處の浪人殿は、慥かに京の歴々方が流され

見やう見まね

春日局

歴々

がな（スイリョウ）

痩せても枯れても

野伏

榮耀

神ならぬ身

てがな來られたに相違あるまい。兄弟の子も、母ぢやの仕付がよいやらして、惡戯はしながら、行儀がよいぞ。」と、鼻うごめかせば、「深い山には猪、鹿の種が盡きぬに、痩せても枯れても京の歴々の果ぢやとならば、金の茶釜の一つ二つはあらうも知れぬ。」と、何心なき里人の風説を、いかにしてか野伏、山賊どもの聞知りたりけん、「さらば、彼の家には金銀もあるべく、財寶も多かるべし。よき隙あらば忍び入りて、我等の榮耀の資本にせん。」と、窃に語らひつゝ覘ひ居たりとは、神ならぬ身のもとより夢にも知るよしなき主人稲葉正成の、ふと苟且の感冒の心地にうち臥したるが、思の外に病勢募りて、いといたう疲れ果てたり。さらでだにかひ〳〵しく、まめやかな

まどろむ

草木も眠る丑三つ頑是なし

る福女は、良人の病に罹りけるより、日夜帶をも解かでの看病、少しも怠なかりけるが、其の誠心の通じたりけん、「今宵は熱も稍低うなりしと覺えて、心地もさまで苦しからず。御身は晝夜手一つの看病に、さこそは疲れ候ひつらめ。暫しが程だにまどろみて、身體を勞り候へ。」と、情ある良人の言葉むげに否まば、なか〳〵（たそこう）に病の爲に惡しかりなんと思ひければ、快く、「さらば暫しが程御免賜はれ。」とて、久々にて己が臥床に入りたれど、病める良人が事、稚兒の上、生憎に心にかゝりて、夜は更けぬれど眼も合はず。

折しも、さゆる嵐につれて遠寺の鐘の聞ゆるを、算ふともなく數ふれば、草木も眠る丑三つなりけり。傍を見れば、頑是

眼さゆ

小夜衣

なき稚兒の寢顏に笑を含めるは、如何なる夢路をか辿るらん。さてもかゝる僻陬に人と成りなば、いつ成出づる期かあらんなど、又してもこし方、行末の事など思ひ出でられて、眼はいよ〳〵さえまさり、思はずも太き息のみつかるゝを、病める良人に悟られじと、強ひて小夜衣引被きて、睡れる樣を粧はんとなせる折しも、枕邊の雨戸ぐわらりと引開けて、忽ちばら〳〵と足音させ、はや眼の前に立現れたる四人の黑き人影は、問はでもしるき曲者なり。あまりの意外に驚きて、はね起きたる福女「何ものぞ。」と聲かくれば、「問はるゝまでもなし。夜陰の稼をなす者なり。今宵夜更けて音づれたるも、此の家に蓄へたる金銀財寶のあらん限りを申し受けんとて

病みほうけたる

血祭

簀子

(一)明智光秀。

業物

逸足出して

なれば、命惜しくば殘らず出してわれ等に捧げよ。否まば病みほうけたる此の家の主人より血祭せん。」と、簀子荒らかに蹈鳴して、いきまきかゝるに、福女は露ばかりもあわて騷げる氣色なく、「さる儀ならば無用なり。主人の病めるを覘ひて、女と侮り入込みたる野伏の愚人ども、そも我を誰とか思へる。明智殿の御內に鬼と呼ばれし齋藤內藏助利三が息女、今は稻葉佐渡守正成が室と知らざるこそ愚なれ。汝等ごとき盜賊に、塵一つだに取らすべきかは。無禮の擧動、そこ動くな。」といひも終らず、床に懸けたる紀正恒が鍛へに鍛へし業物の大太刀おつとり、矢庭に二人を斬つて捨て、尙も漏さじと斬りたつるに、殘れる二人はあわて惑うて、逸足出して逃走

如法の闇夜

るを、福女は追うて庭にまで出でたりしかど、如法の闇夜に何方さして逃失せけん、蹤追ひかけん術無きのみか、病める人の上、稚兒の上はたいたくも心にかゝれば、さまではとて取つて返しぬ。此の事誰いふとなく風評に上りて、「さては心ざまの雄々しく賢きのみにはあらで、武藝亦世の人に勝れておはしけり。かへすゞ〳〵もいみじき女性よ。」とて、人々語りつぎければ、盗賊ども聞きおぢして、其の後は隙を窺ふこともあらずなりぬ。

福女とは誰ぞ。讀む人ははや推せるならん。こはこれ婦女の鑑と世に知られし徳川三代將軍家光の乳母、春日局(二)其の人なりけり。

——春日局——

(二)春日局とは後水尾天皇より賜はりし名。寛永二十年(一六四三)九月十四日歿す。年六十五。

七　妹の病氣の模樣を祖父に報ず

一、筆申上候。私どもはつい〳〵怠がちに相成候を、何時も何時も御情厚き御尋ねの御詞頂き、誠に有難く、くれ〴〵も御禮申上候。

お祖父樣には何時も〳〵御機嫌うるはしう入らせられ候御事、何よりも嬉しき極みにて、此の方妹の病氣以來、尚更無事息災の幸を感じ申候。扨今も申す妹の病氣には、父母始め私共の末に至る迄、看護に殆ど心身を削り申候。其のかひありてか、去る幾日解熱致候てより、二週間目の今日まで、日に日に快く相成候樣子にて、此の分ならば、此の後はたゞ食

物さへ注意致候はゞ、最早氣遣無しと醫者も申され候。看護婦も昨日歸り候處までに相成り、昨今は重湯一合に、珈琲匙五六杯づつの粥粒を雜へて日に三回、あと二回は牛乳七勺づつ頂かせ居候が、俗に申す渴にて、食事の訴へなか〳〵にやかましく、果ては泣出すといふ有樣に候へども、是が大切の處ぞといひて、泣かせ居候。爰一週間も致候はゞ、眞の粥と相成申すべく、大分致しよく相成候はんか。何分時候が時候故、決して油斷はなり申さず、早く春になれかしと、一同念じ居候。次第に御座候。發病より今日まで殆ど二箇月、本人は骨と皮とに相成候へども、壽命ありてか、私共兄弟の樹の一枝の、危く枯れんとして、ふと芽を吹返し候嬉しさ、譬へ樣もこ

結代

れ無く、此の妹さへよくならば、私共は最早何一つほしいとは思はぬ程に御座候。脈に結代ありとて、夜半數回の注射を試み、或時は食鹽にて灌腸など致せし時のあはれさ、思ひ出せばよゝと泣かれ申候。併しこれも昨夜の夢となり、此の頃は朝な〳〵に增す顏の色のはれやかさを見ては、家の中に笑聲の數もまさり行き候間、何卒御安心なし下され度、母に代りてちよと御返事かくの如くに御座候。尙又春にも相成り、本人も汽車に乘得る程にもならば、早速暖きお祖父樣の方へ、一箇月位保養させて頂きに連れて參ると、母が申居候。其の節には何分とも宜しく、今より御願申上候。草々かしこ。

月　日　　花　子

情際文
中古文の筆付

御祖父様

——女子國文教科書——

八　蟲の聲

樋口一葉

垣根の朝顔やう〳〵小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花見ゆるもあはれなるに、松蟲、鈴蟲鳴き弱りて、朝日まちとりて籠馬のはかなげに聲する小溝の端、壁の中など、あるかなきかの命のほど、老いたる人、病める人など聞きたらば、さこそは身にたぐへられて物悲しからめ。

まだ初霜はおくまじきを、今年は蟲の齡いと短くて、早くも聲のかれ〴〵に成りにしかな。轡蟲は喧しき聲も形も、い

あるかなきかの命のほど

と丈夫めかしきを、いつしか時の間に衰へ行くらん。人にもさるたぐひは有りけりとをかし。鈴蟲は振りいでて鳴く聲の美しければ、物嫉せられて齡の短きなめりとうなづかる。松蟲も同じことなれど、名と實と伴なはねば、怪しまるゝぞかし。常磐の松を名に呼べば、千歳ならずとも、一年の末までだにあるべきを、萩の花散りこぼるゝ、やがて聲せず成行く。さる命短きものなれば、暫時も似よやと、此の名を負はせけん親ぞ知らまほしき。

振りいでて鳴くなめり

一とせ此の蟲を籠に飼ひて、露にも當てじといたはりたりけるが、其の頃病に臥したりつる兄の、夜な〳〵鳴く聲の耳につきて、もの侘しく、あの聲なくばいを安く睡らるべし

いを睡る

など言へれば、いそぎ取下して庭草の茂みに放ちぬ。其の夜鳴くやと聽きたれど、さらに聲のきこえねば、俄におく露の身に寒くて、え鳴かぬにかとぞ憐み合へりし。其の年暮れて、兄は空しき數に入りぬ。

又の年の秋、此の頃ぞなど、過ぎにしこと思ひ出づる折しも、夜更けて、近き垣根の中に、さながらの聲きこえぬ。よもあらじと思へど、たゞ其のもののやうに懷しく、戀しきにも、珍しきにも、涙のみこぼれて、此の蟲のやうに、よし異人なりとも、聲も貌も同じからん人の、たゞ今こゝに立出で來たらば如何ならん。我は其の袖をつと捉へて放つまじく、母は嬉しさに物はいはれで、涙止めあへ給はずおはすらん。父は如何さまに惑ひ給ふらんなど、怪しきことをのみなん思ひ寄りぬる。

かくて二夜ばかり鳴きつ。其の後はいづち行きけん、ほのかにも聲の聞えずなりぬ。今も松蟲の聲聞けば、やがて其の折思ひ出でられて物悲しきに、籠に飼ふことは更にも思ひ寄らず。おのづから野邊に鳴き弱りゆくだに、たゞ過ぎにし秋の別れのやうに思はるゝぞかし。

――明治百家文選――

自修文

九　修身要領

福澤諭吉

心身の獨立を全うし、自ら其の身を尊重して、人たる品位を辱めざるもの、之を獨立自尊の人と云ふ。

生々（ものゝ出來て行くこと。）

自ら勞して自ら食ふは、人生獨立の本源なり。獨立自尊の人は、自勞自活の人たらざるべからず。

身體を大切にし健康を保つは、人間生々の道に缺くべからざるの要務なり。常に心身を快活にして、苟且にも健康を害するの不養生を戒むべし。

獨立自尊の人は、一身の進退方向を他に依賴せずして、自ら思慮判斷するの智力を具へざるべからず。

結婚は人生の重大事なれば、配偶の選擇は最も愼重ならざるべからず。一夫一婦、終身同室相敬愛して、互に獨立自尊を犯さゞるは人倫の始なり。

一夫一婦の間に生るゝ子女は、其の父母の他に父母なし。親子の愛は眞純の親愛にして、之を傷つけざるは一家幸福の基なり。

訓誨（なしへ。）

孜々（おこたらず、つとめるさま。）

子女も亦獨立自尊の人なれども、其の幼時に在りては、父母これが教養の責に任ぜざるべからず。子女たるものは父母の訓誨に從つて孜々勉勵、成長の後、獨立自尊の男女として世に立つの素養を成すべきものなり。

獨立自尊の人たるを期するには、男女共に成人の後にも、自ら學問を勉め、知識を開發し、德性を修養するの心掛なかるべからず。

一家より數家、次第に相集りて社會の組織を成す。健全なる社會の基は、一人一家の獨立自尊に在りと知るべし。

社會共存の道は、人々自ら權利を護り、幸福を求むると同時に、他人の權利幸福を尊重して、苟も之を犯すことなく、以て自他の獨立自尊を傷つけざるに在り。

人は自ら從事する所の業務に忠實ならざるべからず。

過不及（餘つたり足らなかつたりすること。）

其の大小輕重に論なく、苟も責任を怠るものは、獨立自尊の人にあらざるなり。

禮儀作法は、敬愛の意を表する人間交際上の要具なれば、苟且にも之を忽にすべからず。只其の過不及なきを要するのみ。

己を愛するの情を擴めて他人に及し、其の疾苦を輕減し、其の福利を增進するに勉むるは博愛の行爲にして、人間の美德なり。

博愛の情は同類の人間に對するに止るべからず。禽獸を虐待し、又は無益の殺生を爲すが如き、人の戒むべき所なり。

文藝の嗜は人の品位を高くし、精神を娛ましめ、これを大にすれば社會の平和を助け、人生の幸福を增すものなれば、亦これ人間の要務の一なりと知るべし。

賭す（かける。）

幇助（たすけること。）

國あれば必ず政府あり。政府は政治を行ひ、軍備を設け、一國の男女を保護して、其の身體、生命、財產、名譽、自由を安全ならしむるを任務とす。是を以て國民は軍事に服し、國費を負擔するの義務あり。

日本國民は男女を問はず、國の獨立自尊を維持するが爲に、生命財產を賭して、敵國と戰ふの義務あるを忘るべからず。

國法を遵奉するは國民たるものゝ義務なり。單に之を遵奉するに止らず、進んで其の執行を幇助し、社會の秩序安寧を維持するの義務あるものとす。

(一)陸軍歩兵中佐渡邊岩之助氏。

太初

一〇　樺太境界劃定行

志賀重昂

明治三十九年八月二十五日午前七時、馬に跨がり、渡邊(一)中佐と同行し、家僕、人夫等に寢具、食料など擔はせて、露領グロデコオにある日本委員本部を出發した。樺太名物の霧は太初以來の樹々に凝つて、雫はぽたり〳〵と落ち、我が馬は幾度となく鬣を振つた。やがて一里、ホロナイ川は、森の絶間から薄霧の中に現れた。

ホロナイ川の岸の第二天測點に達して、馬から下りると、此處には日本の石工が、汗を拭ひつゝ境界標石を刻んで居る。之は三州岡崎の北に產した甚だ堅い花崗石で、南面には

(二)陸軍測量師中柴錄三郎氏。

班

談合

泥濘膝を沒す

日本領とて菊花の御紋章、北面には露國領とて雙頭の鷲を彫るのである。ちやうど其の南面の菊花と、「大日本帝國境界。」の文字とが、見事に彫上つて居る。

石工小屋の西に、四箇の天幕と白楊(ヒロヤナギ)の皮で葺いた小屋とが散在して居るのは、日本地形測圖班本部である。こゝには居ると、班長の中柴(二)測量師が、一露國委員と、頻りに糧食の運搬に就いて談合して居る。何分にも毎日々々數百人の糧食をば、開闢以來の密林と、泥濘膝を沒する泥炭地とに運搬するのであるから、駄馬六十頭を態、浦鹽斯德から呼寄せたさすがの露人さへ、當惑の色を面に現して居る。まして人夫の背許りで運搬しようとする日本人の辛勞は思ひやられる。

格闘

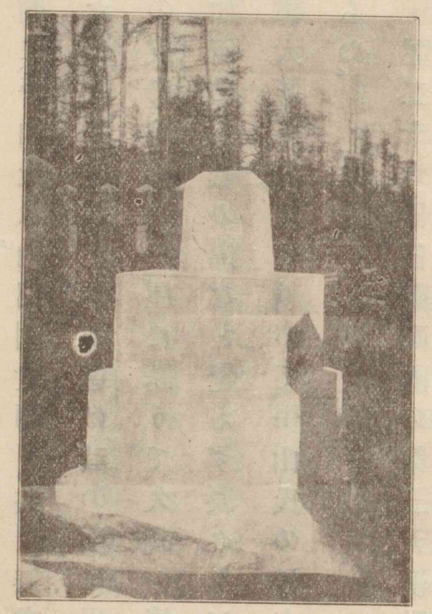
林空

扨、中柴班長と其の部下とは、毎日々々此の密林と泥炭地――蚊と蟆子とが雲霞の如く襲ひ來り、羚羊、馴鹿がさまよひ居り、雷鳥が手捕にせられ、どこでも脚が深く埋る處――を測量するのである。予は、「御苦勞です。」と述べると、班長は笑つて、「毎日密林との格闘です。」と答へた。密林との格闘。實に此の一言は、北緯五十度附近の測圖作業の實際を言盡して居る。

八時半に測圖班本部を出たが、此處から先は徒歩の外行かれないので、馬を返してまづ林空に入つた。林空とは北緯五十度の境界に沿うた林木をば、樺太全島を横切つて、眞一文字に開鑿する其の樹林の隧道である。此の作業はいはゞ幅二丈、長さ四十里の厚い板を鑿で一直線に切通すやうなもので、其の偉觀は樺太境界劃定といふ日露戰役の最後の一幕を壯にするに足るといふべきものである。殊に林空の處々に、高さ七八間の三角柱形の大覘標が立ち、紅白の旗はひら〳〵と其の頂に翻り、旗を超えて遙の山が鏤めた樣に林空の間に見えるなど、我が一代に復と眺められる景では無いと愛でた。

覘標

第三天測點に達すると、平山理學士(三)は天幕の内で、露國委



樺太境界標石

(三)現東京帝國大學理科大學助教授理學博士平山清次氏。

員で天測家であるアフマメチェフ大尉の對星精測の結果を餘念なく點檢して居る。露國委員が十五對星を觀測した間に、平山氏は山田測量師(四)と共に無慮四十五對星を觀測したほどで、勤勉辛苦の色は其の面に現れて居る。予等を白楊の皮で葺いた小屋に誘うて、久濶の情を述べられた際には、如何にも氣の毒なと、覺えず涙ぐんだ。日本の國民は今回の樺太境界劃定に就いて、平山氏の姓名を永く記憶せねばならぬ。

(四)陸軍測量師山田竹彦氏。

無慮

久濶の情

翌二十六日、日露両國の第三天測點精測の結果、點檢全く了つて、境界劃定の事に決した。よつて露國委員と平山、山田二氏の立會の下に、境界木標を埋めることになつた。青森縣の樵夫は、傍の直徑一尺五寸一分の椴松を伐り、露西亞兵は大きな方形の穴を掘つた。其の掘方は日本人よりも早く且巧であるが、穴を深くする爲に時間を要し、なか〳〵掘上らないので、暇潰しにと、木標にする爲に伐つた椴松の木目を數へて見ると、約三百四十箇あつた。即ち此の椴松は約三百四十歳の老木である。そこで予はつく〴〵考へた。

今其の齡を數へてほゞこれに近い事實を見ると、其の種が此の世に萠上つた頃は、足利義昭(五)が十五代の將軍となつた時である。此の樹の一尺位に生長した頃には、秀吉が關白(六)となり、此の樹の五十歳の頃には、大阪(七)は落城して豐臣氏も亡び、百歳の頃には、支那で明(八)が亡びたが、此の樹はいや增に

暇潰し

(五)永祿十一年(一二二八)十月より天正元年(一二三三)七月までの將軍。

(六)天正十三年(一二四六)七月關白となる。

(七)元和元年(一二七五)。

生長し、遙に佛蘭西のナポレオン一世の誕生を聞いて、おのれ亦二百年の誕生日を祝つた。後十年、松前藩士新井隆助は日本人として始めて樺太に入り、又十年、林子平は三國通覽圖說を著して、樺太について、「東韃靼の地續にして、東南海の一出崎なり。」と記し、更に二十年、間宮林藏は樺太から亞細亞大陸に渡つた。此の樹の三百歲の頃は、今上天皇陛下が明治維新の大業を成就し給ひ、後四十年、陛下の御稜威はいよいよ盛に、樺太の半部を得給ひて、今茲に日露兩國境界點の木標となつて、吾も亦聊か御役に立つたと、椴松が老の心に喜んで居るであらう。

かやうに想像から想像を馳せて居ると、やうやく穴を掘

(八)寛文三年（一三二三）。
(九)明和六年（一四二九）。
(一〇)江戸の人。寛政五年（一四五三）歿。年五十六。
(一)常陸の人。文化五年（一四六八）樺太探檢。弘化二年（一五〇五）歿。年六十五。
(二)明治天皇の御事。明治元年は紀元二八年。

終つた。そこで件の木標を埋め、山田測量師は標の南方に立ち、露國委員は北方に立ち、握手して別れた。これで明治三十九年八月二十六日、日曜日の午後六時半、樺太第二ハンダサに於て、日露戰役の最後の幕は閉ぢた。

——讀賣新聞——

幕閉ぢ

一一　母の形見

堀　秀　成

世に曾我兄弟といふ十郎祐成、五郎時致は、父の仇工藤を討たんと、年頃心を苦しめ、身をやつして、時を待ち居たりき。をりしも、源頼朝の富士野の狩せんとて、國々の大小名悉く鎌倉に參集すと聞きて、兄弟は曾我の里にある母のもとに參りぬ。弟五郎は母の意にて出家にせんとて箱根に登せ置

(一)後鳥羽天皇建久四年（一八五三）五月。

勘當

(二)源頼朝。

馬物具

前代未聞

いまはし

(三)伊豆國田方郡。遠笠山の東麓。矢筈山と對す。

かりくら

かれしが、かくては仇を討つことかなはねば、密に山を遁れ下りたるを、母の意にたがふとて勘當の身となれりければ、五郎をば障子の蔭に隠し置き、十郎一人母にまみえて曰く、「ほのかに聞かせ給ふらん、此の頃鎌倉殿富士野の狩に出立たせ給ふとて、國々の武士どもわれ劣らじと、馬物具、美を盡して狩場に參るよし。物の數ならぬ某なれども、此の世の思出に、此の前代未聞の狩場に立交りなんと思ひ立ち侍り。されば暫時の御暇乞に參りたり。」といふ。母聞きて、「そはいまはしき事をいふものかな。父君はいづれの時に失せさせ給ふと思ふぞ。(三)赤澤山のかりくらの歸るさに、人の箭先にかゝりて露と消え給ひしにあらずや。狩場と聞くだにも心憂き事

唐櫃

(四)曾我太郎祐信の事。

なるを。」とて、涙ぐみて見ゆるを、十郎おしかへして、「いかに御女性におはすればとて、詮なき事を宣ふものかな。必ず心遣し給ふな。それにつけて、富士おろしの朝風は、夏も身にしむものと承るを、御下着一つ貸し給へ。」といへば、母唐櫃より小袖一つ取出して與へぬ。十郎押戴き、今生の暇乞とは後にてこそ知らせ給はめと、心のうちに悲しく、小袖の上にはふり落つる涙を、母に知らせじと押隠し、なほ母の傍に居寄りて、「他に着せたきものの候に、今一つ賜はりたし。」といふを聞きて、母色を變へ、「其の着せたき者とは誰がことぞ。此の母も今は曾(四)我殿に養はれて、小袖一つも思ふに任せぬ身なるを。」といへば、十郎、「其の着せたき者はこゝに。」といひつゝ、隔の障子

おし開けば、五郎面目なきさまにてうつむき居たり。母これを見て、「彼は我が子にあらず。」とて立たんとする裾をとらへて、「情なくも宣ふものかな。彼も今は北條殿の烏帽子子になり、五郎時致と名乘り申すを、あはれよき男になりたりとも宣はで、我が子にあらずとは、聞えぬ御詞なるぞかし。弓矢取る身の門出のならひ、千に一つ此の世の御別れとならば、後にこそ悔い給はめ。」といひければ、又小袖一つ五郎にも與へたるよし、其の頃の史どもに見えたり。これ兄弟、母の小袖を打着て、狩場に赴き、母の形見を我が身に添へて、潔く討死せんとの意なり。又元祿の時、大石主税も母の胴着を下に着込みて吉良家に討入りしが、其の夜雪の爲に池に落ちて、それを濡しけり。あくる日の朝、泉岳寺にて義士の人々火にあたる時、主税は其の身につけし形見の衣の濡れたるを取出して乾かし居たるを、父の良雄も見て涙落しゝ由なるが、彼は建久の昔、此は元祿の時。彼は孝子、此は忠臣。其の時代及び忠と孝との差こそあれ、親の形見を身に添へて志を遂げたる一對の美談といふべくこそ。

——琴舍文集——

(五)北條時政。烏帽子子

千に一つ

(六)東山天皇元祿十五年十二月十四日の夜。胴着

一二　秋冬の歌

秋來ぬと目にはさやかに見えねども
風の音にぞおどろかれぬる

みどりなる一つ草とぞ春は見し

藤原敏行(一)

(一)從四位上。歌及び書に能くす。延喜七年(一五六七)歿。

秋はいろ〳〵の花にぞありける　讀人不知

桐の葉もふみわけ難くなりにけり　式子内親王[二]

必ず人を待つとなければ

(二)三卷七三頁を見よ。

述懷

かくばかりうれひなき世を歡のあるべきものと思ひけるかな　景樹

(三)延喜、延長頃の人。

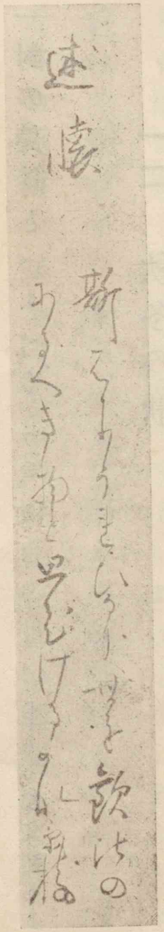
あさぼらけ有明の月と見るまでに　阪上是則[三]

吉野の里にふれる白雪

山深みおちて積れるもみぢ葉の　大江嘉言[四]

かわける上に時雨ふるなり

照る月の影のちり來る心地して



景樹筆蹟（萩野由之氏藏）

(四)對馬守。歿年不詳。

夜行く袖にたまる雪かな　香川景樹[五]

(五)有名なる歌人。京都に住す。天保十四年（一五〇三）歿。年七十六。

一三　主人が旅行先にて世話になりし人へ

内方

おく露に、吹く風に、秋もやう〳〵ふけゆき候折から、御内方皆々樣御機嫌うるはしく入らせられ、何よりの御事に存じ奉り候。先頃は此方主人事、御地に滯在中度々御邪魔申上候處、御事多くいらせられ候にもかゝはらず、いろ〳〵御丁寧なる御もてなしにあづかり、誠に忝く存上り〳〵。殊に昨日は又はる〴〵の處を御心にかけさせられ、結構なる御菓子御送り下され御芳情のほど幾重にも御禮申上候。あやにく主人は一両日前に上京致し、歸宅の日取定かならず候まゝ、

取敢へず代りて御禮申上候。なほ時候がらいづれも樣御自愛の程祈上候。かしこ。

一四　勤勞

湯原元一

體的表現

勤勞といふ言葉は、人間の意志の體的表現であつて、しかもそれが意識的に爲され、且或價値を生ずるものである。それで、之が原料、資本と並立して、經濟上の三大要素の一となるのである。世間には資本のみに依つて生活して、少しも勤勞を要せぬ人もある、所謂富豪の徒は即ちそれである。併し、大多數の者は勤勞に依つて、始めて其の生計の途を得るのである。況や「坐して食へば山も空し。」で、豐富な資本を擁するものと雖も、遂には勤勞の必要に逼られることも少くない。

勤勞は先づ此の點から見て、人生必須のものである。今日は器械の發明に依つて人力を補ふことも尠くないが、尙且全く勤勞を缺くといふ場合には至らぬ。勤勞は依然として經濟發展の一大動力たることを失はぬ。「稼ぐに追附く貧乏なし。」とは、今も昔も變りなき格言である。一國の上から見ても、勤勞を愛する國民は其の國を興し、然らざる國民は之を亡すこと、是亦東西古今に通じて謬らざる事實である。歐米諸國の今日の强大を致したのは、決して學術技藝の進步のみに基づくのではない。其の國民の上下が擧つて勤勞を好み、又之を尊重するからである。人皆各自の勤勞を以て一身一

食はず貧樂

拱手

通弊

家を維持し、遺産、扶助などの如き、他力に依賴せぬといふことを以て原則として居るからである。而して我が國民は此の點に於て、幾多の缺陷を有つて居る。戊申詔書は到る處に捧讀せられるが、我が國民は未だ決して勤勉の民、努力の民とは謂はれない。食はず貧樂の人も、寢て居て果報を待つ人も、なか〳〵少くない。長袖生活、拱手生活、坐食生活、これが未だ多數國民、就中、青年の羨慕の的になつて居る。

今日文明國の通弊は、家庭に於ける勤勞の減退せることである。日常生活は金さへあれば、一切手足を勞せずして出來る。西洋の都市では、臺所なしで暮して居る家族も少くない。既成品、出來合品で以て、すべて用事を辨ずることが出來

自主的勤勞

る。誠に以て便利な世の中と謂ふべきである。ところが、此の便利といふことが、また一方に於ては人間を墮落させる原因となるのである。工場や商店に在つて、大なる機關の一部となつて、同一の仕事を器械的に繰返す外には、何等自主的勤勞を爲さないことになれば、いかにしても身體も弱り、元氣も衰へるに相違ない。西洋人は概して勤勉であるが、併し今日の仕事は其の性質が變つて、此の勤勉が其の人の心身に惡影響を與へるといふ結果を生じた。日本では未だこんな場合には到らぬが、其の都市の生活は、追々と西洋に似て來る。就中、家庭に於ける勤勞の減退する傾向は、日々に益、甚だしくなるやうである。井戸水を汲む苦勞もなければ、洋燈

の掃除する手數もかゝらぬ。下女迄が夜なべの針仕事の代りに、小說を讀んで樂しむといふのが、現代都市生活の一斑である。さればとて、勤勞が戸外に出てしまつて、工場などに於ける仕事が、西洋の如くに甚だしく多くなつたといふ譯でもない。私は生活の便利に赴くのを呪ふのではないが、便利のため一方に勤勞の減退するのは、憂へざるを得ないことと思ふ。勤勞の無い處には、必ず安逸が生ずる。安逸が生ずる處には、必ず身體の衰弱と、元氣の消磨が伴なふ。これが前に言つた通り、必至必然の因果關係である。勤勞は實に人間の守護神である。此の守護神の在らざる所には、必ず惡魔が來り襲ふ。而して今や我が都市の多くの家庭は、將に此の惡

呪ふ

安逸

元氣の消磨

魔の住家とならうとして居る。それで、我が國に於ても、亦此の弊害に對する救治法が、追々と必要になつて來たのである。

——青年團及其敎育——

一五　ユーゴの母

下田歌子

紀元一千八百二年の二月、佛蘭西のベサンソン市に呱々の聲を上げたヴィクトル・ユーゴは如何なる小兒であつたか。身の長は尺に滿たず、頭は非常に大きく、手足は極めて細く小さく、頸の骨は無きが如く軟で、生れて十五箇月の間は少しも首がすわらず、ぐにや〳〵として、始終胸の方へうな垂れて居た。其の不具らしい虛弱な兒が、他日大いに世界に

(一) Besançon. 呱々の聲

(二) Victor Hugo. 有名なる佛國の詩人。(一八〇二—一八八五)

不拔

蒙を化して賢とす

都度

名聲をあげて、「佛蘭西のユーゴではない。ユーゴの佛蘭西だ。」といはれるに至つたのは、そも誰の力であらう。言ふまでも無く、賢にしてかつ健な母が、不拔の耐忍と精密なる注意とによつて、弱を變じて强となし、蒙を化して賢たらしめたからである。

ヴィクトル・ユーゴの父はジョセフ・レオポルド・ユーゴといふ人で、早くから軍籍に身を置いたから、彼のナポレオン第一世及び其の弟ジョセフ・ボナパルトに仕へて少將まで進んだ。當時戰亂の世の事であつて、此處彼處に出征を命ぜられ、初の程は其の都度家族を携へて往つたが、父も其の煩に耐へず、且種々の困難もあるので、遂に巴里に止めて、子供

撫育

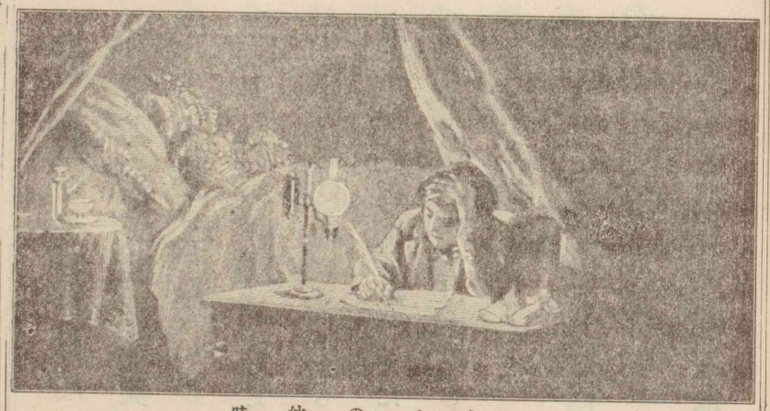
後園

の教育は母の手に一任することとした。然るに、ユーゴの母は賢明にして且膽力あること、殆ど丈夫も及ばぬ程であつたから、ユーゴと二人の兄とを撫育して到らざる所無く、訓誡實に其の當を得た。

ユーゴの母は子を教ふること嚴正で、其の命令が能く子供に行はれた。一二の例證を示せば、次のやうな事もあつた。ユーゴが七八歳の頃、其の後園に多くの果物がなつて居たが、母は子供に誡めて、一つでも母の許を得なければ採ることはならぬと命じたので、ユーゴは或日、「母樣、あの果物が若し能く熟して落ちて居ても取つてはいけませぬか。」と聞いた。母は直ちに「勿論。」と答へた。ユーゴは重ねて、「そんならば、落

ちて腐つてしまつても、取つてはいけませぬか。」と問ふと、母は又同じやうに答へた。それ故、果物の落ちて腐敗したのが澤山あつたが、誰も拾ふ者は無かつた。

又隣家へ、テランドといふ天文學者が引越して來て、隣に男の兒が許多居るのを見て、庭にはいつて來て騷がれては迷惑だからとて、隔の垣を作らうとした。すると、ユーゴの母は、「其の儀ならば御心配には及びません。『お隣の庭へ行つてはならぬ。』と申しつけますから。」と言つた。其の時テランドの心の中では、「さういふものの、頑是無い男の子供の事だから、おぼつか無いものだ。」とかう思つて居た。然るに爾後何箇月立つても、此のテランドの庭内には、小さい靴の跡は一つも



ユーゴの幼時

附かなかつた。

ユーゴの母は幼き子供を携へて、西班牙から巴里に還つて棲んだが、其の家は、庭園も廣く、種々の草木が榮えて、四時をり〳〵に花咲き實を結ぶ一小天地の樂園で、母子は世界の兵塵も餘所にして、茲に平和な春を樂しんで居たのである。然し其の當時の教育界には、智德の必要を說く風が熾で、未だ體育の方に注意を向けなかつ

たにも拘らず、賢き母は子供の體力の增進を圖り、さまざまの方法を以て、體育を奬勵した。又ユーゴが文學の天才であるのを見て、之に敎へていふには、「御前は文學で生活の道を立てようとは思ふな。生活の道は外に講じなければならぬ。それで無ければ、とても眞正に高尙な文學者となることは出來ませぬぞ。」と敎へた。子どもには園藝、大工、又は他の手工學を正課の外に修めしめて、專ら自ら立つの精神を修養させたのである。

一千八百十七年、佛國學士會院で、題を設けて懸賞の詩を募つた時、ヴィクトル・ユーゴは十五歲であつたが、此の募集に應じて出した詩は、最優等であつた。

其の後、母は肺炎衝に罹つて病床に呻吟して居たので、子供は日夜其の傍を去らず、心を盡して看護した。此の大病中も、母はユーゴの詩を見るのを樂しんで居たのであるが、或懸賞詩の募に應じて、ユーゴは一詩を送らうとしつゝあつた折柄、母の大患に遭つたので、看護に追はれて、其の方に心を移す暇が無かつた。一日母はユーゴに、「此の間應募しようといつた詩はもう出來たか。」と問うたので、ユーゴは、「まだ作りません。」と答へると、母は、「いくら臨時の用が出來ても、詩を止めるやうな事はいけない。勉めて早く作つたらよからう。」と、輕く誡めたが、さも〳〵失望らしい容子であつた。それから暫くすると、母はすや〳〵と睡に就いたので、其の間にユ

ーゴは忽ち鉛筆を取つて急作の詩を書いて、其の紙片をそつと睡つて居る母の手に置いた。母は睡から覺めて、之を讀んで、はら〳〵と落涙して喜んだ。

此の母の熱涙に濕うた所の詩篇は、其の時應募詩中の最優等たる喝采を得た。

母は遂に起つこと能はずして、愛兒が孝行な看護の手から離れて、不歸の旅人となつてしまつたけれども、佛蘭西の文豪ヴィクトル・ユーゴの名は、此の母の丹誠によつて、長く世界に傳はる事になつたのである。

——良妻と賢母——

喝采

不歸の旅人

一六　淑女とは何ぞ

三宅雪嶺

gentleman ゼントルマン

lady レーデー

詩經の開卷第一に、「窈窕淑女、君子好逑。」とあるは、淑女の語の由つて來た所であつて、其の君子と相對すること、レデーのゼントルマンに於けるに似てゐる。漢學の盛な時代には、教育ある者は皆此の句を口にして居つたが、現在の日本では、もはや君子といふ語が多く行はれず、其の代りに紳士といふ語が行はれ、而して女性の之に對するものは舊のまゝ淑女である。紳士といふほど廣く行はれぬにしても、確かに之と對になつて居る。

併し紳士といふ語は廣く行はれて居るだけ、其の何たるかも知れ渡つて居るが、淑女といふ語は少しく明白を缺く。彼は紳士であるといへばすぐ分り、彼は淑女であるといへ

實相

ば聊か分りにくい。淑女とは何の事であるか。分つた樣であつて判然せぬ。之に相當する外國語もさうである。ゼントルマンの何たるかは分りきつて居るやうに感ぜられて、レデーの何たるかは幾分の疑を免れない。是は、男は世間に活動し、世間の風波に揉まれて、實相が分つて來たが、女は幾分か裏面に潛み、分りにくゝなつて居るからである。ゼントルマンもレデーも、元來貴族の尊稱に用ひたのであるが、ゼントルマンの方は、今では位置の如何よりも品性に重きを置き、貧乏して居つても、品性が高ければかく名づける事になつて來た。レデーの方もかくあるべき順序であらうが、今なほ品性の如何を問はず、唯位置に拘つて居るのは、社會の未だ

進歩しないことを示してゐる。

衣食足つて禮節を知るといふから、衣食の計は大切である(一)にしても、世には衣食の外に爲すべき事が多い。或は衣食の計を考へず、唯發明に汲々としてゐる人もあるから、世間に益を與へるのは、富んでゐる人と貧しい人と孰れが多いかは決するに苦しむ。ゼントルマンといふ語が、廣く行はれるやうになつたのも偶然でない。レデーも亦さうあるべきである。

ところが、男には貧しい生活をしてゐても立派な者もあるが、女にはさういふ者が尠い。中には見上げた者があるにしても、大抵は生活が貧しければ心も貧しい。紳士の語が上

(一) 管子の語。五卷七二頁を見よ。

流、下流を通じて行はれつゝ、淑女の語が下流に當てはまりにくいやうに感ぜられるのは、其の邊からでもある。

併し上流、下流といつて判然分れて居るものでない。我が國でも、十年間に無爵から侯爵になつた人もある。金の點からいへば、俄に金滿家になつた者も珍しくない。社會の動搖して居る時に、表面上の階級で人の品位を定めると間違を生ずる。どこまでも其の人の人格に重きを置くやうにすべきである。幾ら豪奢を極めても、品性の下劣なのは紳士でなく、幾ら粗末な服裝をしてゐても、品性の高い人は紳士である。華族でも、富豪でも、心の貧しい女は淑女といへぬ。却つて百姓家や漁師町に褒むべき女を見出す事がある。上流に比較的淑女らしい者があるにしても、一概に淑女とは上流の婦人ときめる事は出來ぬ。

如何なるが淑女であるといへば、大僧正ニューマン(二)がゼントルマンに就いて言つた所は、寧ろ淑女に當てはまつて居る。「ゼントルマンは何人にも苦痛を與へぬものである。人の困る樣な事をせぬ。弱い者を勞り、羞づかしがる者に優しくする。萬事控へめにする。人に施すとき貰ふやうにする。」といふやうな事をいつて居る。一口にいへば、溫良恭謙讓であるが、此のことは紳士に向つてよりも、寧ろ淑女に向つて望ましい樣に思ふ。下流にあつても、かゝる品性を備へて居る者は、宜しく淑女と看做すべきである。君子、淑女といふ語は、

(一) Newman. 英國の人。(西暦一八〇一—一八九〇)

溫良恭謙讓

初から貧富に關係がない。貧にして君子たり、淑女たるに少しも妨はない。ゼントルマン及びレデーといふ語が、初め貴族を指して、漸く品性に重きを置くことになつたのとは違ふ。これは支那が精神的文明に於て、西洋に先んじてゐた證據である。

淑女といふは誠に好い語である。三千年來傳はつて今尙新しきを覺える。レデーの貴族出なるに勝つて居る。君子の語は紳士に取替へられたが、淑女の語の取替へられぬのは歡ぶべきことで、淑女の語がどれだけ擴るかが懸念すべきである。現に紳士の語の行はれるが如く擴るであらうか、或は唯作文に使はれ、事實に於て廢滅に歸するであらうか。女性の品性が日に進まば、淑女といふ語も日に擴るべきである。此の語がどの邊まで行はれるかで、社會上に於ける女性の力を量る事が出來る。昔は年の始に關雎(三)の詩を讀んだりした。今はさういふことが無いにしても、淑女の語が過去に消滅したものとすべきではない。君子と淑女との價値はとこしへに變ぜぬ。

(三)詩經の開卷第一、即ち「窈窕淑女」云々の詩のある章。

一七　本多重次

新井白石

去にし天正十三年三月に、(一)德川殿御背中に疔といふものの出來て、既に危く見えさせ給ひしかば、內外の醫療術を盡しけれども其の驗なく、唯弱りに弱らせ給ひ、自らもこれまで

去にし　(一)德川家康。
疔

宗徒

祈らぬ神佛もなく立てぬ願もなし

手を束ぬ

腫物

と思し召しけるにや、宗徒の御家人等召集めて、御後の事ども仰せ置かる。人々の周章いふに及ばず、平民、百姓等に至る迄、其の程々に隨ひて、祈らぬ神佛もなく、立てぬ願もなし。

本多重次御枕に取りつきて、泣く〳〵申しけるは、「殿も定めて覺えさせ給ひなん。重次が昔此の病を受けしに、立所にしるし得し良醫の候。彼を召して見せ試み給ふべし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康また死を決す。此の上醫療其の詮なし。且は命を惜しむに似たり。」とて用ひ給はず。重次大いに怒つて、「かほどの大事の腫物、かろ〴〵しく思し召し侮つて、事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。それにまた良醫して治せしめ參らせんとするを用ひ給はで失せ給はん事、御

あつたらしき命

えこそ止めねさも候

心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上は、彼等いかでか治し參らすべき。年老いたる重次が、御跡に下つて御供叶ふべからず。さらば御先へ參らん。」とて、御前を罷り立つ。

徳川殿大いに驚かせ給ひ、「あれ止めよ。」と仰せければ、近く侍ふ人々走り出で引止め、「仰せらるべき旨あらせられ候。」といふ。重次大いに聲を怒らして、「最期の暇乞ひてまかり申す者を、見苦しい殿原の止めやうや。」と罵つて出でんとす。「されば候。其の人を止めよとの御使が、えこそ止めねと申せとは、おとなしくも候はぬ本多殿。」といはれて、「げにさも候。」とて、御前にまゐる。

負はぬ手も候はず

徳川殿「汝は物に狂ひてかくは言ふか。家康未だ死しはてぬに、たとひ家康が命終るとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。又汝等も如何にもして、一日も世に殘りて、若き者ども捉して、我が家の絶えざらん樣を計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いや〳〵、それは人によつての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰までも候はず、犬死せん人の御供、其の詮なし。重次若年の昔より、こゝかしこの軍に從つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたはは、重次が身一つに集りて、世に交らん事叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも

(二)北條氏直。

はかゞしき

踵を旋らすべからず

(三)武田勝頼。

敬はれも仕れ。殿の亡くならせ給ひなば、他人までも候ふまじ。まづ御聟の北條(二)殿、我が國々を取らんとし給はんに、若き人々が、行末久しう仕へんと頼みきつたる主に、忽ち別れて氣おくれし、はかゞしき矢の一筋をも射出す事叶ふべからず。當家亡されん事、また踵を旋らすべからず。重次それ迄ながらへて、あの年寄りたるかたは者は、徳川殿の譜第にて何がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には耻を曝すらんと、後指さゝれん事、老の耻何事か之に過ぎ候ふべき。此の比までも武田(三)の家人等御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にもあはれに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿

ことわり至極

艾

に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず。我が身の果もあさましきに、まづ御先に死する事にて候。」と申す。「汝がいふ所ことわり至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任すべし。天命既に至りて家康空しくならんとも、汝も亦家康が心に任せ、いかなる耻を見つべくとも、一日も生殘りて、後の事よきに計らふべしと存ずるや、いなや。」と仰せければ、「重次が申す旨に任せられんには、重次いかで復仰を背き參らすべき。」と申す。「さらば醫師召させよ。」とて召さる。

醫師やがて參りて、「御灸治よろしかるべし。」と申せば、重次艾とつてすうる。御灸の痛み覺えさせ給はねば、艾を增し加ふる事多くして、後いさゝか痛ませ給ふ由仰せければ、御藥

(一)陸前國宮城郡多賀城村の古碑を距る東十町許の處。六玉川の一。
(二)陸前國宮城郡鹽竈町。千賀の浦とも古歌に詠めり。
(三)鹽竈の港にある松島の一島。
(四)鎌倉右大臣實朝の歌。

をつけて參らせ、御藥湯をも進め奉りしに、其の夜の半ばに、御腫物潰れて、膿血おびたゞしう流れ出で、御惱立所に輕ませ給へば、重次は嬉し泣に聲を限りに泣く。御前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。此の人かゝる奉公の事ども、世に傳ふること多し。盡く記すに暇あらず。大略を記すのみ。

——藩翰譜——

一八　奥の細道

芭蕉

野田(一)の玉川に冲の石を尋ね、鹽竈(二)の浦に入相の鐘を聞く。五月雨の空いさゝか霽れて、夕月夜幽に、籬(三)が島ほど近し。蜑の小舟こぎつれて、魚分つ聲々に、「つなでかなしも。」(四)と詠みけ

彩椽

(五)後鳥羽天皇の御代。平家亡びて三年目。(一八四七)

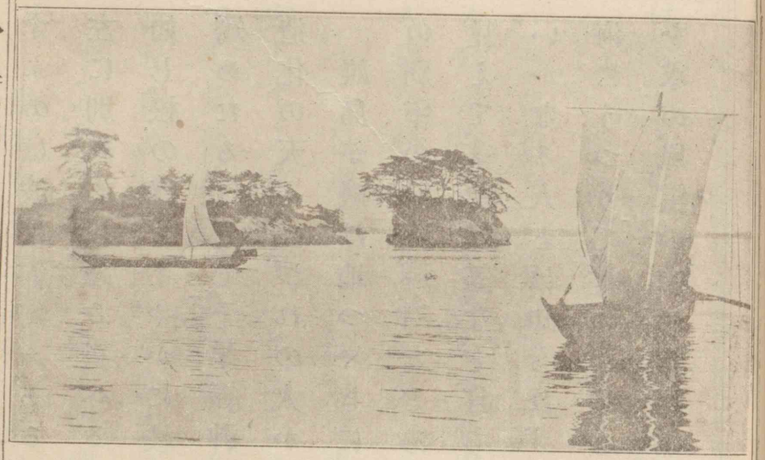
(六)名は忠衡。藤原秀衡の子。忠衡一人父の遺言を守りて義經を助け戰死す。

ん心も知られて、いとゞあはれなり。其の夜盲法師の琵琶をならして奥淨瑠璃といふものを語る。平家にもあらず、舞にもあらず、ひなびたる調子うち上げて、枕近うかしましけれど、さすがに邊土の遺風忘れざるものから、殊勝に覺えらる。早朝鹽竈の明神に詣づ。國守再興せられて、宮柱太しく、彩椽きらびやかに、石の階九仞にかさなり、朝日朱の玉垣をかゞやかす。かゝる道の果、塵土の境、神靈あらたにましますこそ、我が國の風俗なれと、いとたふとし。神前に古き寶燈あり。かねの扉の面に、文治三年(五)和泉三郎寄進とあり。五百年來の俤今目の前にうかびて、そゞろに珍し。彼は勇義忠孝の士なり。佳名今に至りて慕はれずといふことなし。誠に、「人能く道を

扶桑

(七)支那湖南省の北部。支那本部第一の大湖。

(八)支那浙江省孤山の麓、江南の勝地にして、梅花にも名あり。



松島

勤め、義を守るべし。名もまた之にしたがふ。」といへり。日既に午に近し。船をかりて松島に渡る。此の間二里餘。雄島の磯に着く。

抑、ことふりにたれど、松島は扶桑第一の好風にして、凡そ洞庭(七)、西湖(八)を辱しむ。東南より海を入れて、江の中三里浙江の潮を湛ふ。島々の數を盡して、欹つものは天を指し、伏

すものは波に匍匐ふ。あるは二重にかさなり、三重に疊みて、左に別れ、右に連る。負へるあり、抱けるあり、兒孫を愛するが如し。松の緑こまやかに、枝葉汐風に吹撓められて、屈曲自ら矯めたるごとし。千早振神代の昔、大山祇のなせるわざにや、造化の天工、いづれの人か筆をふるひ、詞を盡さん。

雄島が磯は地つゞきにて、海に出でたる島なり。雲居禪師(九)の別室の跡、座禪石などあり。松の木蔭に世を厭ふ人も稀々見えて、落穗、松笠など打ちけぶりたる草の庵閑に住みなし、いかなる人とは知られずながら、まづ懷しく立寄る程に、月海にうつりて、晝のながめ又あらたまりぬ。江上に歸りて、宿を求め、風雲の中に旅寢するこそ、あやしきまで妙なる心地

(九)土佐の人。有名なる禪僧。仙臺侯招いて松島の瑞巖寺に住せしむ。後光明天皇特に紫衣を賜ふ。

はせらるれ。

松島や鶴に身をかれほととぎす　曾良

予は口をとぢて、眠らんとしていねられず。舊庵をわかる時、素堂、松島の詩あり。原安適、松がうらしまの和歌を贈らる。袋を解きて今宵の友とす。かつ杉風、濁子が發句あり。

十一日、瑞巖寺に詣づ。當寺は三十二世の昔、眞壁平四郎出家して入唐、歸朝の後開山す。其の後雲居禪師の德化に依りて、七堂甍改りて、金壁莊嚴光を輝かし、佛土成就の大伽藍とはなれりけり。かの見佛、聖の寺はいづくにかと慕はる。

十二日、平泉へと志す。聞傳へたるあねはの松、緒絶の橋など、人跡稀に、雉兎葛蕘の往きかふ道そこともわかず。終に路

ふみたがへて、石の巻といふ湊に出づ。(一)「こがね花咲く。」と詠みて奉りたる金華山、海上に見渡され、數百の廻船入江につどひ、人家地をあらそひて、竈の煙立ちつゞきたり。思ひかけずかゝる所にも來れるかなと、宿からんとすれど、更に宿かす人なし。辛うじてまどしき小家に一夜を明して、明くれば又知らぬ道まよひ行く。袖のわたり、尾ぶちの牧、まのの萱原などよそめに見て、遙なる堤を行く。心細き長沼にそうて、戸伊摩といふ處に一宿して、(二)平泉に到る。其の間二十餘里ほどとおぼゆ。

(一)今の石巻町。北上川の河口。人口約二萬。

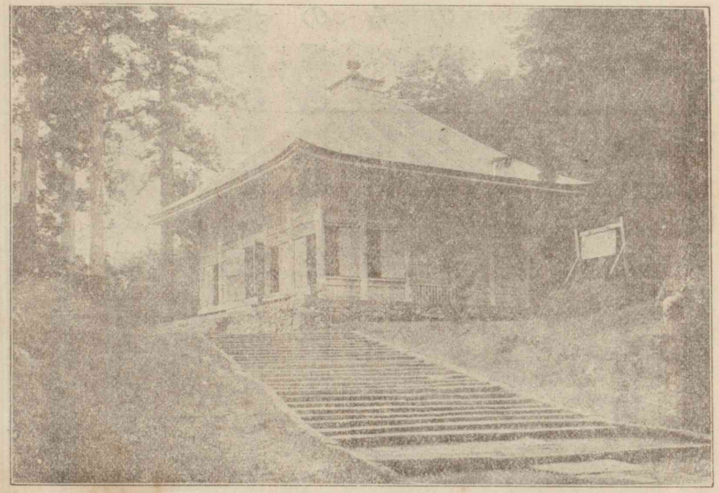
(二)こがめろぎの御代榮えんとあづまなる、みちのく山にこがれ花さく。(萬葉集巻十八、大伴家持)

(三)陸中國西磐井郡平泉村。

(三)清衡―家衡―基衡―秀衡―國衡―泰衡―忠衡(和泉三郎)

(三)三代の榮耀、一炊の中にして、大門の址は一里こなたにあり。秀衡が跡は田野になりて、金鶏山のみ形を殘す。まづ高舘にのぼれば、北上川は南部より流るゝ大河なり。衣川は和泉が城をめぐりて、高舘の下にて大河に落入る。泰衡等が舊跡は衣が關を隔てゝ南部口をさし堅め、夷をふせぐと見えたり。さても義臣すぐつて此の城に籠り、功名一時の叢となる。(四)「國破れて山河あり、城春にして草青みたり。」と、笠打

(四)「國破山河在。城春草木深。感時花濺淚。恨別鳥驚心。烽火連三月。家書抵萬金。白頭搔更短。渾欲不勝簪。」(杜甫、春望詩)



金色堂

敷きて、時のうつるまで涙を落し侍りぬ。

夏草や兵どもが夢のあと

かねて耳驚かしたる二堂開帳す。經堂は三將の像を殘し、光堂は三代の棺を納め、三尊の佛を安置す。七寶散失せて珠の扉風に破れ、金の柱霜雪に朽ちて、既に頽廢空虛の叢となるべきを、四面新に圍みて、甍を覆ひて風雨を凌ぎ、暫時千歲の記念とはなれり。

五月雨の降りのこしてや光堂　――奥の細道――

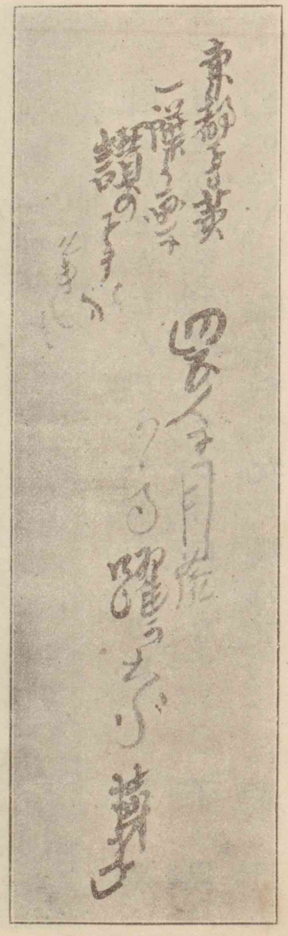
頽廢

一九　秋冬の句

白露や無分別なるおきどころ　宗因

秋風や茄子の數のあらはるゝ　木白

東都なる英一蝶が畫に讃のまれければ四五人に月おちかゝる　蕪村

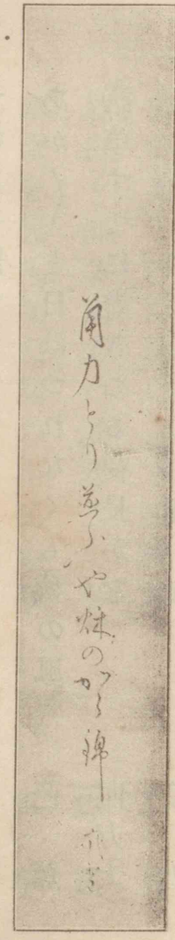


蕪村筆蹟（伊藤松宇氏藏）

小坊主の門に立ちけり秋の暮　闌更

鹿鳴くや木の葉かく僧唯一人　黑梅

角力とり並ぶや秋のかゝら錦　嵐雪

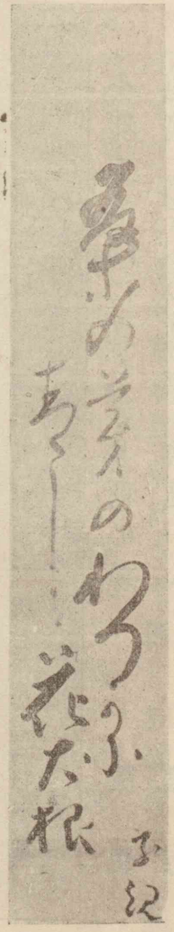


嵐雪筆蹟（角田竹冷氏藏）

蜻蛉の顔はおほかた目玉かな　知足

桑の芽のわづかに青し　花大根　子規

すむ月や髭をたてたるきりぐす　其月
あかくと日はつれなくも秋の風　芭蕉
語草すでに盡きぬる夜長かな　四方太
としぐに天長節の日和かな　鳴雪

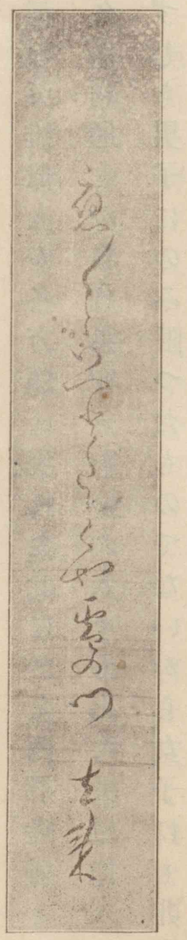


子規筆蹟

園の戸をがたんぴしやんと秋の風　把栗
南天の實をこぼしたる目白かな　子規
きりぐす鳴くや貧女が機の下　牛里
家問へば木槿の垣の三軒目　樂天

應々といへどたゝくや雪の門　去來

あさ漬の大根あらふ月夜かな　俊似
しぐるゝやもみの小袖を吹返し　去來
こがらしや炭賣ひとり渡舟　蕪村
馬の息ほのかに寒し今朝の霜　民丁



去來筆蹟
（角田竹冷氏藏）

井のもとの草葉に重き氷柱哉　鬼貫
葱白く洗ひ立てたる寒さかな　芭蕉
水底を見て來た顔の小鳴かな　丈草
餅搗の臼往來す京の町　把栗

二〇　和宮内親王の御婦德　其の一

萩野由之

維新の政變は社會組織の一變する時代であつたから、種種な英雄偉人が各方面に現れた。此に於て、西郷隆盛とか、大久保利通とか、岩倉具視とかいふ人々も出た。英雄偉人は必ずしも男子にのみ限つたものでないから、女子にも非常な偉い人の出たのは當然である。さうして働かれた方面こそ異なれ、其の事業は決して男子に劣らないのであつた。和宮親子内親王と申し上ぐる御方の如きは、其の婦人の中の第一の御人物である。

御臺所

國是

和宮親子内親王は孝明天皇の御妹君で、明治天皇の御叔母にあたらせられ、德川第十四代將軍家茂公の御臺所におなりになつた方である。我々はかゝる完全な模範的婦人を尊き皇族の御中に見るのを、無上の光榮と信ずるのである。

德川幕府が長き太平をつゞけて三百年近くになつた頃には、政治は次第に衰へて、もはや天下の人が德川氏の政治に厭いて來た。そこへ始めて外國から示威的に交際を求めに來たので、幕府は兵備が無いから餘儀なく交易を許さうとする、朝廷では外國を拒絶しようとする。民間の議論も無論外國との交際を嫌うた。そこで幕府は朝廷と一致して、國是を定めなければならぬが、幕府の威力が到底それには足

降嫁

らぬ。よつて皇室の御威光を假りて、即ち皇室と德川將軍とは親睦一致であることを天下に示して、其の上で外交上の處分をしようと考へた。幕府は其の一手段として、孝明天皇の御妹君たる和宮を將軍家茂公の夫人に申し受けたいと、御降嫁を奏上した。宮は勿論江戸へ降嫁することをお望みにならぬ。天皇も一人の御妹を遠方へお遣はしになることをお喜びにならぬ。之が爲に其の緣談は容易にまとまらなかつた。結局幕府は「宮の降嫁さへ相かなへば、きつと十年以内には外國人を退けませう。」と申し上げた。

天皇は「外國人を退けて國内太平になることならば。」と仰せられ、宮も「國の爲とあらば、水や火の中でも辭しません。」と

席溫る暇なし

申し上げられたので、勅許になつて、宮は遂に將軍の御臺所として、江戸へお下りになつた。即ち文久元年御年十六の時であつた。

そこで當時の志士はこれを聞いて、「幕府は宮を人質として江戸へ御迎へ申すのである。」と申して憤慨し、はては「幕府討たざるべからず。」といつた者さへあつた。さて御降嫁の後も、世の中は愈多事となつて、十四代將軍も席溫る暇もなく、京都へ出張したり、大阪へ下つたりして、江戸城に居られる日とても少く、遂に慶應二年七月大阪城で薨去せられたから、宮が御夫婦の間の圓滿は、僅か五年間に過ぎなかつた。宮は亡き將軍の事を思ひ出で給ひて、

みつせ川世のしがらみのなかりせば
君もろともに渡らましものを

と詠じ給ひて、切なる思を述べさせられた。やがて二十一歳で御髪を切捨てゝ尼となり給ひ、靜寛院宮と申して、淋しい寡居の御暮しをなされた。

二一　和宮内親王の御婦德　其の二

萩野由之

其の後、慶喜公が十五代の將軍となつたが、時勢幾度か變つて、慶應三年十月には慶喜公は政權を奉還し、翌年正月には鳥羽、伏見の戰爭が起つて、前將軍は江戸へ逃歸り、官軍は

命脈
風前の燈火

確乎
りりしい

江戸城の總攻擊をしようと、諸方から江戸へ迫つたので、德川氏の命脈は風前の燈火の有樣となつた。此の時德川の家をして全きを得しめたのは、實に靜寛院宮の御力が主なるものであつた。

宮は京都、大阪邊の騷は薄々御聞きになつて居たが、慶喜公が俄に江戸城にかへつて宮に拜謁を願ふと、宮は慶喜公の爲には先代の夫人だから、宮も一方ならず御心配になつたものゝ、「もしや慶喜に朝敵たる行があつたのならば、とても面會は許されない。」と確乎と申された。二十一歳の寡夫人の御詞としては、何とりりしいものではないか。

然るに、第十三代將軍家定公の御臺所たる天璋院夫人の

申し開く

執成もあつたので、面會は御許しになつた。そこで慶喜公も宮に伏見、鳥羽の戰爭のあらましから、決して自分には朝廷に對して敵對の心は露程も無い事を申し開いて、是非々々京都に對して宜しきやうに御取扱を願ひますと懇願せられたので、宮もそれならば德川家の一大事と思し召されて、愈、力をお入れ遊ばされる事になつた。

そこで朝廷の方へ、侍女の土御門藤子といふを遣はされて、德川家の家名だけはお立て下さるやうにと、切に申し送られたが、其の御文言の中には、

官軍を差向けらるゝやに承り、當家の浮沈此の時なりと心痛致候。此の度の一件はともかくも重々不行屆の事故、

汚名を雪ぐ

所存

慶喜一身を何樣にも仰せ付けられ、何卒家名は立行き候樣幾重にも願度候。後世まで當家朝敵の汚名を殘し候事は、私の身にとりて實に殘念に存じ候へば、汚名を雪ぎ家名相立つやう、私身命にかへて願上候。是非々々官軍差向けられ御取りつぶしに相成候はゞ、私も當家の滅亡を見つゝながらへ居るも殘念に候ふまゝ、きつと覺悟を致候所存に候。私一命は惜しみ申さず候へども、朝敵と共に身命を捨て候事は、朝廷へ恐入り候事と、誠に心痛致居候。

と仰せられて居る。御決心の男々しい樣子が顯れて見えるではないか。

御身は皇室の御出でありながら、一度德川氏へ降嫁あら

せられた上は、德川家一門と共に生死を共にせねばならぬと、確と御決心ましました上の事でなくては、とても斯程の御文は出來ぬことと察し奉られるのである。

宮の朝廷へ出された御手紙は數々あるが、御決心は益〻固くあらせられた。殊に朝廷から内々「江戸は戰爭になるから、京都へ御歸りが宜しからう。」と申越された時の御返事には、取分け貞操義烈の御心掛が明らかに見えるものがある。

貞操義烈

宮の御力によつて、德川家の處分も事無く終り、德川龜之助殿即ち今の家達公に、御家御相續の勅命が下り、次いで駿河、遠江、三河の三箇國の中で七十萬石を、德川家の領地として下し賜はる旨の御達があつて、德川家の命脈も永く續くことゝなつたが、事のこゝまでに運ぶには、宮の御心盡しが最大なるものであつた。

宮の御命にかけてもと思し召されたかひあつて、德川家は永續する事になつたから、明治天皇は如何にもして、宮の御心を慰めんものとの思召で、「今は京都にお歸りになつて、心安くお暮しの方が宜しからう。」と御勸め申し上げられたところ、宮は、

「江戸には芝の增上寺、上野の東叡山寛永寺など、德川家祖先累代の廟墓所がありますのみならず、增上寺内なる亡夫昭德院樣の墳墓は、未だ靈屋の建築も竣工仕りません。今日私が江戸を去つて京都に永住しますれば、何人も香

竣工
香華

金枝玉葉の御身

華を供へ墓の塵を掃ふ者もございません。両寺の墳墓は、空しく草や苔に埋つてしまひますから。」

と申して、暫し上京の猶豫をお願ひなされた。

さて徳川が靜岡に移住のことなど、皆事無く濟して後、明治二年正月、久々振にて御上京あらせられ、明治天皇に御對面あつて、暫し御滯留で、明治七年江戸にお歸りになつたが、十年九月脚氣の御病症で、箱根塔之澤に御轉地あらせられ、遂に彼の地で昭德院の後を追はせられた。御年僅かに三十三歳であつた。金枝玉葉の御身を以て、家國の難に遭遇して、しかも其の進退宜しきに適ひ、志操愈、堅固に、よく婦德を守つて一生を終り給うた宮の御事蹟は、古今に珍しく、永遠に

法名

掛金

女子の龜鑑である。靜寛院宮と申すは其の法名である。

――讀史の趣味――

二二　保險

文明國に於て保險事業の經營せられざる處なし。保險事業とは少人數の蒙るべき損害を、多人數にて分擔するの制度に外ならず、人類それ自らの生存の旨にも合へり。即ち保險事業を經營する者、即ち保險者と、保險を附せんとする者、即ち保險契約者と豫め契約をなし、保險者は保險契約者より一定の掛金を受取り、其の契約中に損失あらば、約束の金額を保險契約者又は保險金受取人に拂渡すなり。

例へば二十歳の人、五十歳滿期として一千圓の養老保險を契約したりとせよ、一年の掛金は三十圓餘なるべし。掛金の拂込は必ずしも年一回たらずとも、一年數回拂、或は毎月拂等の便法もあらん。月拂として毎月生活の餘裕一二圓を拂込むも可なり。契約已に成立し、一回の掛金を拂込みたる以上は、萬一不慮の災害又は急病にて死亡せる場合には、一千圓の保險金は遺族の手に入るなり。契約せし人幸に無事にして五十歳に達する時は、自身に保險金を受取ること勿論なり。終身保險は被保險者の死後に拂ふ契約にして、滿期の年限なし。故に其の掛金の率も更に低し。

生命保險を契約せんとする者は、まづ醫師の身體檢査を受けざるべからず。身體に病ある者は、初より其の契約を拒絶せらるゝこと普通とす。身體の健否によりて、掛金の割合にも多少の差あり。

生命保險の外に傷害保險あり、傷害によりて業務を休む時の爲の保險なり。其の他建造物、動産に對する火災保險、船舶及び其積荷の遭難に對する海上保險等、保險事業の範圍種類は極めて廣し。

現今我が國に保險事業を營める會社は、日本の會社六十にして、英米の會社三なり。保險を契約せんとする者は、成るべく基礎の確固たる會社を選定するをよしとす。

近年我が政府にては、二百五十圓以下の簡易生命保險の

經營を始め、一般貧民に利便を與ふ。之には身體檢査を受くるの必要なし。

二三　播州の老婆

小川直子

昔羽柴秀吉の播州姫路の城を築かんとせられし時、石材に乏しくして當惑の折から、近きあたりに住めるひとりの老婆ありて、おのが日頃用ひたる茶臼を秀吉の陣所に持參して、聊かなるものに候へども、參らせんとて奉りしかば、諸人もこれが爲に勵まされ、我さきにと石材を運び、不足を補ひしかば、城は日ならずして成就してけり。秀吉深く老婆が志を感じ、彼の茶臼を人目に觸易き天守臺の石垣に加へ築

かれければ、此の石今猶人目に觸れ、見る者をして其の志を感ぜしむ。老婆が一旦の志、かくもろ人の奬勵となり、姫路の城のとく成就せしこと、實に大なる功といふべし。凡そ國のため、君のためには、をみなといへど、おのが力に隨ひて、公に奉ずる心あらまほしきわざならずや。されど外國にても、國難の時、國中の女どもが身の飾など賣却して、軍用を助けし例少からず。まして忠孝の心に富める我が國の人々、義氣なくてはあられぬわざなりかし。又常に貧しきをあはれみ惠まんはさらにて、天災地變にて食絶え、家を失ひ、困難身に積る者ある時などは、無用の費を省き、慈善の財を施して、博愛を衆に及す事を思ふべき事ならずや。これ實に國民たる者

賣代なす

慈善の財

ゆめ〳〵

(一)本書卷三第十九課參照。
(二)岡西惟中の妻。享保十一年(一七二六)歿。年六十三。
(三)丹波柏原村の人。元祿十一年(一六九八)歿。年六十四。
(四)近江大津の人。芭蕉の門人。
(五)名は秋。其角の弟子。本書卷一第三課參照。
(六)傳詳ならず。

の務なり。ゆめ〳〵忽にすべからず。

——高輪御殿進話錄——

二四　女流の俳諧

坪內雄藏

德川時代には、女流にして俳諧を能くせし者少からざりき。曩に學べる千代女の外、園女(一)、すて女(二)、智月(三)、秋色(四)、花讃(五)などあり。皆同じ頃の人なり。園女の句に、

いそがしや菫を摘めばつくづくし
春の野遊のさま、見る樣なり。

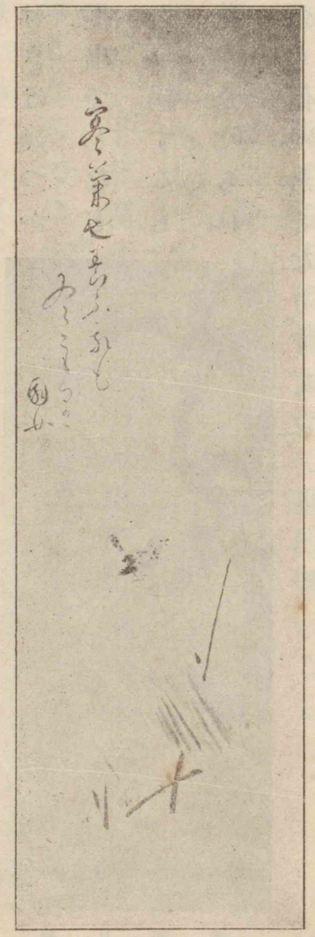
鼻紙のあひだにしぼむ菫かな
摘取りし菫の花を程經て見出でて、萎れたるをも捨てかぬる女心見えてしをらし。

衣がへみづから織らぬ罪ふかし
春となり、秋と移るにつけても、母の恩の深きを思ふ心根の殊勝なるを見るべし。

負うた子に髮なぶらるゝ暑さ哉
汗の流るゝ暑き日のさま思ひやらるゝなり。智月の句に、

寒菊や養ふ我も冬ごもり　園女

しをらし



園女筆蹟
(角田竹冷氏藏)

鶯に手元やすめん流しもと
やさしき娘心見えて愛らしからずや。
朝顔の咲くや親にも叱られず
けさは幾つか
咲出でしなど
と、早起するも
花ゆゑ、叱られ
ぬも花ゆゑとなり。すて女、
雪の朝二の字二の字の下駄の跡
これは六歳の時の句なりとぞ。秋色の句に、
雉の尾のやさしうさはる菫かな

あき入にどんとめいたり小鳥ども　智月

智月筆蹟
（伊藤松宇氏藏）

とは雉の姿の優しく美しき風情を寫せるなるべし。なほ、
井の端の櫻あぶなし酒の醉(七)
といふ名高き句あり。花讃、
かんざしよ櫛よさて世は暑いこと
うるさきは髪かざりなり。洗髪などにて涼まば如何にとの
心なるべし。
子を寢せた間をぬけ出でて涼かな
母とならではえ知らぬ涼しさなるべし。なほ千代女の句三
四を擧ぐれば、
鶯や又いひなほしいひなほし
轉びても笑うてばかり雛かな

（七）本書卷一第三課參照。

月夜にもかげほしがるや女子連

など、いづれもめでたし。總じて女は物に感ずること深く、かつ細かき處までも思ひやり屆く故に、其の詠出でたる句も亦あはれ深し。

——國語讀本——

二五　手紙二章

一　女中の周旋を賴まれたる友に答ふ

朝夕の寒さ肌にしむころと相成候處、皆々樣御障もこれ無くや。母上樣御旅行中、あなた樣御一人にて、嘸かし御忙しき御事と存候。それにつけても、先頃の御たのみ、早く御返事申し上げたしとは存じながら、父の所用思の外にながびき、

心あたり
これはと思ふ者
まんざら
鄙に育つ
氣立

昨夜やう〳〵歸宅の事とて延引致候。

父もあちらへ參り候てより、心あたりを聞合はせ、人にも賴みおき候由には候へども、何分にも田舍の忙しき折、これはと思ふ者も見當らざりし由に候。しかし連れ戻り候者は、父の宿りし家の主人の甥とかにて、年は十七歳、初奉公の由には候へども、家貧しき爲、これ迄叔母の家に參り居候者にて、多少の苦勞は致候事なれば、まんざら働けざる事もあるまじと存ぜられ候。家族は母の外、兄弟妹各一名にて、士族の由に候へば、鄙に育ちたる割合には、行儀作法も幾分心得居り、高等小學も卒業いたし候由に候。氣立は正直にて優しく、御家の事話して見候處、さる家ならば、上りて、針持つ道など

も心得させていたゞき度と申候。もし御忍召も御座候はゞ、何時にても御目見に參上致させ申すべく候。父事參上いたし、詳しく御話申上ぐべき處、何分にも昨夜歸宅いたし、今朝直ちに出勤致候へば、失禮ながら私よりちょと御知らせ申上候。かしこ。

氣苦勞

物堅き人

二　娘より母の病氣看護の爲歸れる女中へ

秋氣身にしみ候折柄、母樣の御病氣は如何に候や。常に親孝行のお前樣故、さぞかし御心配の事と御察し致候。ましてや、弟妹樣など多き事とて、御前樣の御氣苦勞いかばかりならんと心配致居候。御前樣の兩親は物堅き人とて、これまで御前樣の暇を乞ひに來られし事、曾てためし無き事なるに、

よしなき事

此の度は弟樣を迎にお遣はしなされしより察すれば、餘程の御重體と察し申候。

申す迄も御座なく候へども、よく弟妹樣の御面倒、母上の御看病怠なき樣なさるべく候。殊に父上には餘程の御年の由に候へば、御心配なさらぬやう、御前樣の御注意肝要に候。病人には心配は大毒、其の心配をさせぬが非常にむづかしく、よしなき事を聞きたがりて自ら心配するが病人の常と承り候。よく〳〵御注意なされ、一日も早く御快癒のほど祈上候。

こちらの事は私が代りて致居候へば、いさゝかも御心配下さるまじく候。先は御見舞まで。かしこ。

自修文

二六　手紙を書く心得

幸田露伴

意を盡す　いひたい事をのこらずいふ。

冗長　くだ〳〵しく長いこと。

繁文縟禮　わづらはしい飾、こみ入つた儀式。少し轉じて面倒な禮儀の意。

すべて文章は、辭簡にしてよく意を盡すを以て理想とすべし。就中、書翰文は簡潔を以て主となすべし。多くの場合に於て、文句の冗長なるは好ましからず。或人は書翰の短きは人に對する尊敬、若しくは、愛憐の情薄きに似たりと誤想するものあれど、辭簡に情多きは、情少くして辭多きに比すべくも無く立勝れり。情の厚薄は、辭の長短にあらずして、意の如何にあり。書列ねし文句のみ如何ばかり長ければとて、其の情こまやかならざらんか、そは唯繁文縟禮に終らんのみ。

世に事の繁き人は、一日の中にも數通若しくは數十通の書翰に接す。此等の人々にして、徒らに長くくだ〳〵しき書翰にのみ接せんか、一々それらを披見するは、恐らく一つの苦痛なるべし。然るに世に事業を爲さんとする程の人は、如何に苦痛なればとて、我に來る書翰を委しく披見せずして止むが如き事は無からん。されば、かゝる人に向ひて繁文縟禮を重ぬるは、誠に心なき所爲なりといふべし。よしやさる身の際ならぬ人にしても、交通日々に頻繁を極め、勢ひ時間を貴重せざるべからざる今日に當りて、益なき事を長々しく書列ぬるは、如何なる點よりするも、決して賞すべきことにあらず。要するに、用事を以て旨とする日用文は、なるべく簡單にして、誤解を生ぜざらしむるを以て主となすべし。

披見　ひらいて見ること。

さる身の際　然るべき身分の人。

次に趣味の書翰、純粹の用事ならざるものゝ如きも、長きは餘り好ましからず。これもなるべく簡單明瞭に記し

て、誤解を生ぜざらしむる樣に心掛くべし。此の類の書翰の長きは稍忍ぶべし。然れども、これまた簡潔にして趣多く、情こまやかにして正確を失はず、韻致に乏しからぬ樣に心を用ひて物すべし。以上の心掛をよそにしては、千言萬語を列ぬとも、そは「ことば多ければ品少し。」といふ弊に陷るべし。されど、一概に簡單にとのみ言はんも弊なきにあらず。例へば、旅行先より父母の許に狀況などを報ずる文には、あながち簡單なるばかりを以て、よく其の體を得たるものなりとはせず。言ふ迄もなく、簡單にして其の要を盡し得なば、これ最も好ましきものなれども、そはすぐれたる筆の力を有する人ならでは、なす能はざる所ならん。されば、かくの如き場合には、簡單といふよりも、むしろ親切懇篤ならんことを主として、場合によりては、我が日記の全部を記し送るも妨なし。かくの如き場合に當りて、長きを厭ふは愚なるわざなりと謂ふべきなり。

要するに、書翰文の作法は書翰を受取る人になりて見て一考すれば、如何なるものが然るべきか、忽ちに明白なるべし。已上手なりといはぬばかりに、生漢語、生古文を振廻して書ける書翰ほど、見にくきはなし。

まなじりをきはめて眺む

二七　高山の眺望

島崎藤村

高嶺に登り、まなじりを
きはめて望み眺むれば、
わが行くさきの山河は
目にもほがらに見ゆる哉。

青に入る
こゞし
きほふ
精魂
虚しき天の戸

みそらを凌ぐ雲の峯、
碎けて遠く青に入る。
こゞしく、くしき磐が根の
つらなり亙る山脈は、
海にきほへる高潮の
驚き亂れ湧くごとく、
大山づみも動ぎいで、
わが精魂を奪ふかな。
誰かは譏り、誰が恨む、
翅をのべしはやぶさは、
虚しき天の戸を衝きて、

高きみ空に翔れども、
打振り、打振る羽袖だに、
引きとゞむべき雲もなし。
遠く緑におほはれて、
望をつゝむ野の方に、
東にくだる河波の
行くへを見れば、紫の
山の麓をうちひたし、
滔々として流れ去る。
あゝ大空に風吹けば、
雲自ら舞ふごとく、

迷の霧にこめられし
暗き谷間を歩みいで、
高嶺にあれば時を得て、
はるかに揚る我が心。

かへりみすれば、越えてこし
山はうしろに落入りて、
荒れにし森の影もなく、
寂しき野邊も見えわかず。
日の照すとも、七重八重、
我が故郷は雲に隠れて。

——藤村詩集——

間切る　押切る　底る　あだに心の煎らるゝもの

二八　潮まつ間

幸田露伴

風に逆ひて舟を行るには、間切るといふ工夫もあり、流に逆ひて舟を進むるには、押切るといふ意地もあれど、唯春の日の潮の底りて、遠淺の海の盡く干潟となりたる時のみは、意地にも、工夫にも、舟を操らん道無く、あだに心の煎らるゝものなり。

曾て此の事をいひ出でて、「さる折にも何とか爲すべき手段ありや。」と、老いて物事に巧者なる舟人に問ひけるに、舟人打笑ひ、「何時にても纜を解かんとならば、何時にても水ある所に船を繋ぐべし。我等は繋ぐ時に解くことを思ひて繋ぎ、解く時に繋ぐことを思ひて解く。素人は繋ぐ時は解くこと

心を焦る

を思はず。解く時は繋ぐことを思はず。こゝを以て歸らんとして歸る能はず。進まんとして進む能はず。徒らに心を干潟に焦るやうの事もあるに至るなり。若し既に干潟に居すわりたる舟となりたらんには、我等なりとて其の塲に臨みて何の手段のあるべき。唯少しは早くとも、心長閑に食事など濟ませて、やがて立働かん折、足もつれのせぬやうに、舟の中を取りかたづけ、猶それにても時餘らば、舟道具を丁寧に檢め繕ひなどして、時と潮とを待つべし。潮を待つは愚しけれども、潮を待たぬよりは賢きわざなり。何時か一度は爲さで叶はぬ事を爲しつゝ待たば、必ず來るべき潮は、大抵其の事を爲し終へぬほどに、早く來るものなり。何時か一度爲さで叶はぬ事は、小さき舟の中にてもいと多きものなれば、潮待つ間に爲すべき事の無しといふは無し。潮待つ間に爲すべき事のあるを見出して之を爲さば、唯時の足らざるを覺ゆるのみにて、更に心の煎らるゝことなど有るべくも無し。」と言ひけり。おもしろき言葉なりと思ひしかば、今に忘れず。

——潮待ち草——

二九　世界の歌枕

上田　敏

大西洋の浪は、太平洋のとは稍違つてゐる。太平洋の浪は大きくゆるく打つ。大西洋のはいつも天氣が惡い爲か、とにかく稍小さく鋭い。空の色の關係もあらう。其の色は澄んだ

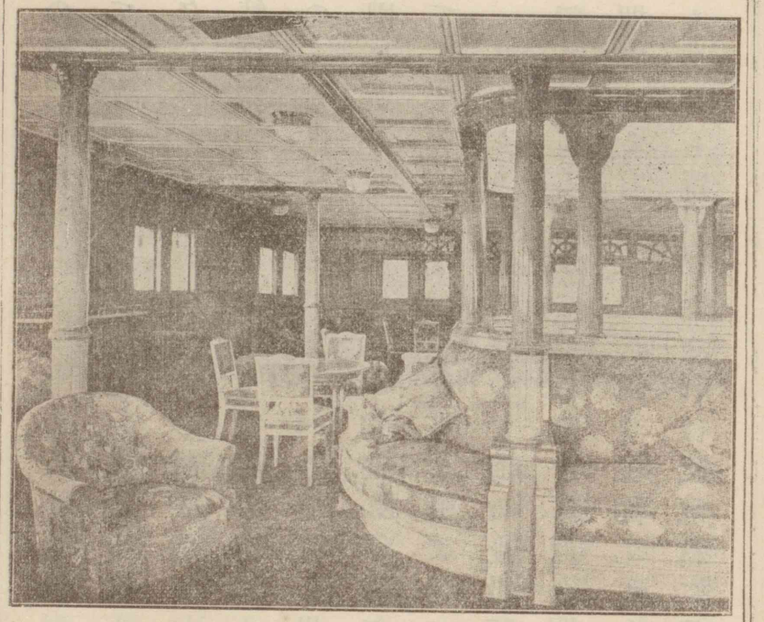
絢爛

藍では無くて、稍黑ずんだ、時としては鉛のやうな色に見える。大西洋も緯度稍高くなるに隨つて、浪の色淡く、入日の花やかさは異ならないが、夕雲の色彩も稍あつさりとして、南海の絢爛な色よりも却つて美しい。

私の大浪に遭つたのは、桑港に着く三日程前の一日であつた。小山の如き浪が寄返るので、さしもの大船も木の葉のやうに動搖したが、幸にも此の日は頗る上天氣で風も無かつたので、甲板の上で其の壯觀を味ふ事が出來た。大西洋の方は一體に山なす巨浪は少いが、米國を去つて五日ばかりの一日は、暴風雨に類した天氣に出遭つた。要するに、海の景色は取出でて人に語る事は難いが、一度經驗のある者が後

單調

究竟



春洋丸音樂室

日追想すると、單調のやうでも、其の美は千變萬化である。これ實に究竟の歌枕。

陸上の景色は、土地に由つて著しい相違がある。一般には言盡されぬ。布哇の如き、四時氣候を同じうして、太平洋

遠淺の海

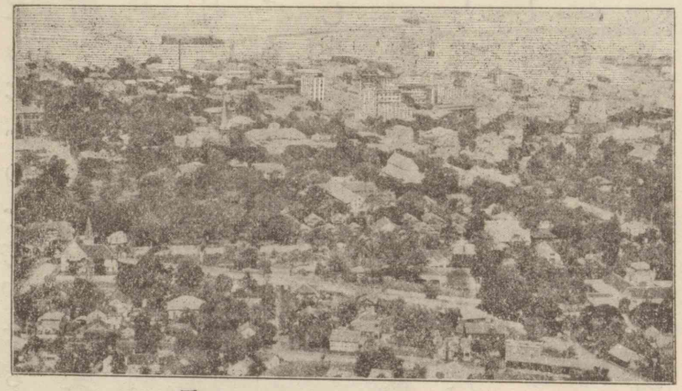
蔚然

(一) Golden Gate. 北米合衆國の西岸サンフランシスコ灣。

逸すべからず

の樂園と稱せらるゝ地に行くと、滿目の風光一變して、初めての人には非常に面白い。遠淺の海が極めて澄んだ蒲黃の色に見えて、それに椰子の林が背景にあしらはれてゐる風情は、繪畫で見るよりも、實際の方がよほど美しい。これからの人が、歌枕の一つとすべき所だと思ふ。カピオラニーの公園に遊んだ時、蔚然たる榕樹の下枝に放し飼の孔雀が止つてゐて、其の艶な羽毛が、花の樣であつたのを記憶する。

又桑港の港近くなつた海の上、數百羽の鷗が船に沿うて舞つてゐる所から遙に眺むれば、金門灣(一)頭の大浪が港口に押寄せる有樣、水の屏風を立廻した如く、海の上にも瀧があるかとも疑はれた。これはた歌枕に逸す可からざるものと



布哇公園

思ふ。熱帶地方は言ふ迄も無いが、歐米の風光は日本に比して、いたく趣を異にしてゐる。彼の國には、我が國よりも草木が尠い。見る山も見る山も、日本のやうには松杉が山全體を蔽うてゐない。あるは芝山の如く、あるは只岩石のみのやうな山の所々に、たま〳〵青々した樹木が十數本繁つてゐるといふ風の景色が多い。それで日本人は動もすれば、我が國の景に草

木の多いのを誇稱するが、それは稍偏した見方であつて、両方ともにそれ〴〵の美しさがあるのは無論である。併しながら、極めて土地の磽确(かくかく)としてゐるのは、勿論景色が好いとは云はれない。私の通過した米國の一部分は、殊に冬枯の候であつたから、人氣ない物さびしい廣漠の野を行く心地がした。

概してあちらの木はひねくれてゐない。皆すうつと直立して、地面を離るゝ數尺の所から、四方に向つて枝が規則正しく手を擴げてゐる。かう規則正しくなつてゐる枝振は、いかにも風趣が乏しいやうであるが、實際はさうでない。

さて亞米利加の歌枕一二を擧げれば、ワイオミング(二)の平

磽确

(二) Wyoming. 合衆國の西部にある州。平原あり。

桑港金門灣

(三) Salt Lake. 合衆國ユター州に在り。

原であらう。眼の屆く限り一物もなく、雪がちら〳〵降つてゐる中を、たまに羊の群が鐵道線路のあたりをさまよふなどは、優美の景には缺けてゐるが、一種壯大の趣がある。名にし負ふソルトレーク(三)の鹽の湖を中斷するルウシンの長路を通ると、平原の間に丘陵の起伏して、雪斑の岩角に朝日の反射する景色、これ亦歌枕の價値あ

るものといはねばならぬ。又コロラド(四)の北、所謂キャニオン(五)の一部は、奇岩大石路傍に轉じて、さながらの鬼工と思はれる。此の景も歌枕に逸す可からざるものである。

さて此の歌枕といふ詞は、もう少し意味を廣くして見たいと思ふ。即ち山水の風景ばかりに止めず、進んで紅塵萬丈の市街、煤烟の立昇る工場の光景なども、詩歌に寫し出して面白いと思ふ。例へば、紐育の摩天閣なども、其の或物は建築美を持つて居ないが、中には一種の新しい趣味の徹底して居る物がある。ブルウクリン(六)の釣橋の上から紐育を望むと、建列ねた大廈高樓が雲に聳えて、殊に薄暮は二十階、三十階の窓の燈が、空の星かときらめいて輝く。又はホボーケン(七)の

(四) Colorado. 合衆國の一州。
(五) Canon. 合衆國西南の河流にして、有名なる峽谷をなせり。
鬼工
紅塵萬丈
徹底
(六) Brooklyn. 紐育市にあり。一八七〇年より約三十年にして竣工せし長さ六五〇〇呎の釣橋。
薄暮
(七) Hobken. ハドソン地方の一市。

港口、朝霞の景色、夕暮の色、他の國に無い趣味がある。更に進んで人情風俗を加へて景色を見ると、愈好箇の歌枕がある。紐育はマヂソンの大辻、世界の富を集めた繁華な場所に立つて、伊太利の移民が彈く哀なバレルオルガンの聲を聞くと、聲こそは細けれ、近代文明の弊害を呪ふ切實の音樂かとも聞える。又はヲオルストリートの執務時間に其の邊を通ると、黃金の爲に萬人の血眼になつて狂ふ樣は、賭博場を見るよりも猶慘澹たる感を與へる。

又これとは反對に、冬の田舍に入つて見ると、葉は落盡した楓樹の並木路を、雪を蹴つて小學生徒の走つて行く所などは、「若き米國萬歳」の聲を發したい位、ニューイングランド(八)の

近代文明の弊害を呪ふ切實の音樂
(八) New England. 合衆國西部の人口稠密なる部分。

田舍の景色は、落着いて若々しい、如何にも懷しい感を與へる。

歐米の大都會中、どこが好いといはれたなら、誰も〳〵賞めるのは巴里であらう。市街の美觀、道路の整頓は言ふに及ばず、氣候の溫和、風光の美、風俗の雅致ある、かういふ所に住んで、詩でも詠んでゐたいとは誰も望む所かと思ふ。(九)シャンゼリゼーの大通は、實に長安の盛時もものかは、端麗高雅世界第一である。歌枕はどこにもごろ〳〵してある。文明の最高に位するは佛蘭西である、而して巴里である。それでまた極めて華美な町中にも、何となく仙人めいた趣がある。車馬絡繹たるセーヌ(一〇)の河の邊に、悠然綸を垂れたる隱君子もあ

(九)Champs Elysees. 巴里市の大路。

端麗高雅

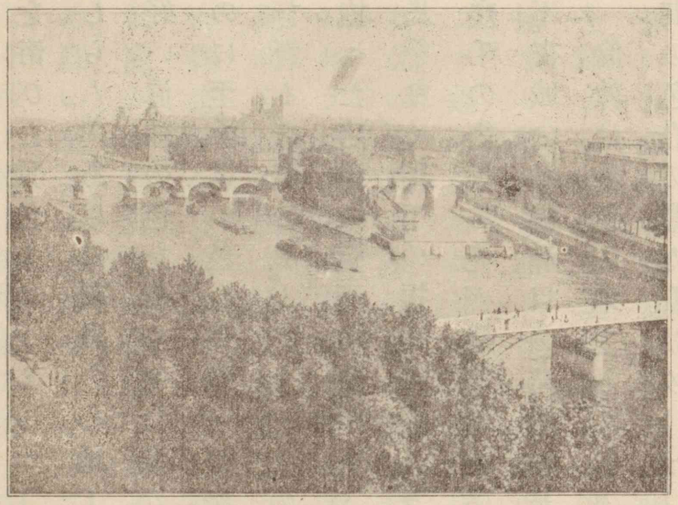
車馬絡繹

(一〇)Seine. 巴里市を貫流してイギリス海峽に注ぐ。

綸を垂れる

(一)Notre Dame. 巴里市内の大寺院。

(二)歐洲にて中古時代に流行せし一種の建築の樣式。



巴里市街

る。橋の下には犬の髮結床がある。河岸の石垣の上にはお馴染の古本屋がある。其の他ノートルダム(一)寺の建築は、ゴシック(二)式の標本で、朝夕の色の變化が著しい。嘗てノートルダムの總べての變化を味はうと、一日一晩の間眺望した事もあつたが、最も美觀を極めたのは夕方で、黃金の光の波

を浴びた景色を、(一三)サン・ミシエールの橋から眺めた。また夜のしら〳〵あけに朝風の心地よく頰を拂ふ時、之を望むのも好い。眞珠の色を曇らせた樣な色から、薔薇色のはでやかなのに至る迄の色合の微かな影を味ふ事が出來る。其の外花を賣る老媼の風、シアルロットの帽子を被つて、ボールの箱を抱へた店通の賣子の姿、(一四)ペルシロンこいふ牛よりも大きい馬を曳く馬丁の振、夜半近く芝居のはてた後に雨が降つて、幾千の街燈の光が敷石に映る所、自動車は唸り、馬車は軋る不夜城の壯觀。滿目の時勢粧、皆歌枕ならぬは無き趣である。

倫敦は景色の地として、餘り人は賞めないが、色彩の變化、其の色合の豐な點は、(一五)ターナーの繪にある通りで、風俗美は

(一三) St. Michel. セーヌ河に架けたる橋の一。

(一四) Percheron. 佛蘭西原産の馬。

時勢粧

(一五) Turner. 英國の風景畫家。(西暦一七七五—一八五一)

(一六) Thames.

(一七) Napoli. ナポリ州の首府。同名の灣に臨む。

(一八) Salzburg. 墺地利の西部。東アルプス山脈の北邊。山水秀麗の地。

尠いが、光線の變化ばかりは味ふ値がある。併し同じく風光を味ふにしても、住心地よい巴里の方が、あらゆる旅客の賞揚する所だと思ふ。たゞ倫敦にもテームス(一六)上流のリッチモンド邊からの両岸の風景には、英國特有の美觀が現れて居る。此の他風車、朱い屋根、清き淀に名ある和蘭もよく、伊太利にはナポリ(一七)邊の夢のやうな景色もよい。瑞西は風光明媚と稱せられる國で、誰も皆賞揚するが、私は寧ろ南獨逸を採る。南獨逸ザルツブルヒ(一八)の景は日本によく似てゐる。要するに、何處が一番風光は絶佳であるかといふ問題は、一概にはきめ難い。見る人々の心によつて、天下到る處、如何なる地、如何なる所と雖も、皆相當の美は味はれるものである。浪のはげ

しい英海峽の船の上でも、暑さ堪難い紅(一九)海の甲板でも、見る心によつてそれ〴〵の美しさが感ぜられる。元來歌枕などと取出でてきめるのは、或は間違つてゐはしまいか。天下皆歌枕ではあるまいか。私の旅行は、學術研究の爲でもなく、又特別な使命を帶びたのでも無い。たゞ漫然と飄遊したので、感覺を通して印象を捉へただけである。——心の花——

(一九) Red Sea アラビヤとアフリカとの間にある細長き海。

飄遊

自修文

三〇　旭日旗下の人種　其の一

石田收藏

日本は面積に於ては小さいが、割合に多くの人種を含んでゐることは、他國に見るべからざる特色である。

北方から南方へ順に人種學上から其の種類を數へると、本島人たる大和民族以外、千島土人、樺太土人、北海道土人、琉球人、朝鮮人、臺灣人、臺灣蕃人、又日本國内ではないが、大正四年占領した南洋にも土人が旭日旗の蔭で生息してゐる。千島土人は即ち千島アイヌであり、樺太土人は樺太アイヌ、オロッコ、ニグブンの三つであり、北海道土人は北海道アイヌである。南洋には土着のものに二種族あるが、其の外に獨逸屬領時代に他の島から連れて來た種族も多少ある。大和民族については誰も知る如くである。

アイヌ

アイヌの最も目につく特徴は、體が非常に毛深いことである。男は髮、髯が多く、又それを尊んで居る。眉の濃く、眼玉の窪んでゐることも目につく。儀式の時には、男は頭に

遊牧　牛や羊を飼ひ草木のある所へ移ること。

放牧　はなしがひ。

鉢卷やうのものを裝飾につける。女も髮を伸ばして肩の邊で斬る。アイヌの女は入墨をするが、北海道の土人と樺太の土人とでは其の入れる場所が違ふ。前者は口の周邊の外、腕と手の甲とに鯨し、後者は單に口邊に施すのみである。

オロッコとニグブン

オロッコといふ種族は、ニグブンと共に日本領樺太の內でも北部に住んでゐる。此の種族はアイヌとは違つて遊牧の民であるから、季節によつて其の居住地を變へる。夏の暑い時には海岸若しくは河口近くに出で、漁業を營んで食料を貯へ、漁期が終つて冬が來ると、水邊を去つて山中にはいる。山中では冬籠をすると同時に、狩獵に從事し、傍ら馴鹿の放牧をする。馴鹿は北方寒地に特有の動物で、其の形は日本の鹿に似てゐるが、昔からオロッコとは密接な關係があり、其の放牧する獸の重なものとなつてゐる。

ニグブンは人種學上ギリヤークと呼んでゐるものであるが、土人間では、之をニグブンと呼ぶ。此の種族は刳木船を造ることに於て侮るべからざる技倆を持つて居る。今日ではオロッコも刳木船を用ひるが、オロッコは元來山にゐる種族であるから、造船は巧でない、今日使用してゐる舟も、多くはニグブンから買つたものである。

両種族とも寒地の住民のこととて、冬季には多く馴鹿の毛皮で作つた衣服を用ひる。共に鮭と鱒とを食物とし、日に干して十分乾かし、冬季の間の貯とする。魚肉の外、鳥肉をも食べ、又獸類の肉をも食べるが、普通吾々の食べる樣な野菜は用ひない。けれど植物性の食物として野生の百合、其の外二三植物の實を食べる。住居は一定の場所に

構へるので無いから、移住に便利なやうな天幕を組立て、移住の場合には、僅か二三時間で、すべてを取りまとめることが出來る樣になつてゐる。

琉球人と朝鮮人

琉球人は顏の形を見ても、本島人によく似てゐる。男は髮を結び、笄を挿してゐる。又女は老幼とも髮を小さく束ねて結び、笄を挿してゐる。笄は身分によつて、或は銀を用ひ、或は竹を用ひるといふ風に違つてゐる。衣服の形は本島人とは趣を異にし、風俗、習慣も餘程違つてゐる。食物は常食としては甘藷を取り、身分のよい人は米を用ひてゐる。彼等の特に好むのは豚の肉である。家屋は場所によつて違ふが、多くは茅葺の平家である。

朝鮮人も本島人に近い特徴を持つてゐる。容貌を見ても、殆ど內地人と區別がつかない程のもある。顏は所謂細面で、毛も髯も少い。頭髮は男女共に伸ばし、三つ組にしてゐるが、男は妻帶した後には結髮し、馬の尾で造つた一種の冠を被り、女は髮を束ねてゐる者もある。衣服を觀ると、男女共にゆるい上着と袴を着けてゐるが、男の上着は腰の邊までしか無いごく

アイヌ

ギリヤーク

琉球人

朝鮮人

臺灣人

マリアナ人

短い物で、其の上に上覆を着けてゐることもある。女の衣服は男のより短く、乳の邊までしかない。女も勿論袴を着けてゐる。男女とも足には靴を穿く。食物は常食は米で、肉類は鳥肉、魚肉の外、牛と豚を食べる。野菜類も色々あるが、特に辛い物を好む癖がある。家屋は周圍の壁は土と石で積上げ、屋根は瓦葺或は草葺で、寒い時には暖を取る爲に溫突を焚くのが特徴である。

溫突　床下に坑を通じ中に火をたいて上の室内をあたためるやうにしたもの。

自修文

三一　旭日旗下の人種　其の二

石田收藏

臺灣には臺灣人と臺灣蕃人との二種族が住んでゐる。臺灣人は支那本土から移住したもので、現今の支那に住む漢族と同一である。蕃人は卽ち臺灣土着の住民で、蕃人

(一)支那本土に住む眞實の支那人。

にも生蕃と熟蕃との二種がある。熟蕃は支那人の感化を受けて、それに似寄つた生活をしてゐるが、生蕃は純粹に野蠻な生活を營んでゐる。生蕃には今日色々な小さい部族があつて、風俗などもそれ〴〵違つてゐるが、一帶に未開の狀態に在り、頗る獰猛な種類である。此の種族は、今日では山の奥深く生活してゐるが、元は平地に住んでゐたので、段々支那から移住した漢族に追はれて山中にはいり、今日の如き生活狀態を呈するに至つたらしい。臺灣の山は非常に嶮しいから、其の深山生活に適する爲に、擧動が敏捷になつて、深山幽谷と雖も自由自在に馳廻ることが出來る。衣類は固有のものは、或植物の纖維を材料として作つた手織物であるが、今日では木綿を用ひるものもある。生蕃の手織物は蕃布として知られてゐるが、蕃布を

獰猛　わるだけしいこと。

敏捷　すばしこい。

織る爲に、美しい木綿の類を解いて、其の絲を取つて、纖維の中に混ぜて織込む。それ故蕃布を遠くから見ると、ネルの樣に美しく見える物もある。織物の外、塲所によつては獸皮を揉革にして着物に仕立てたものもある。とにかく一般に簡單な着物で、男は上半身だけを覆ふに過ぎない。

食物は甘藷、おほさといも、陸稻、粟、稗、川魚等であるが、狩をした場合には鹿、猪などを食することもある。野菜物の代りに菜を鹽で煮て、其の汁を飲む。

家屋は普通間口二三間、奥行二間ばかり、屋根は塲所によつて一樣ではないが、大抵草葺で、中には石盤石で葺いたのもある。家の中は大部分土間で、床を張つた所は僅かしかない。其の床張の所は寢床ともなり、また食事をする所ともなる。

分布　散らばつてゐること。

南洋の土人

南洋の土人には重なものが二種ある。マリアナ及びヤップにゐるものはチッモロといひ、全島に廣く分布してゐるのはカナカといふ。

土人の風俗習慣は島々により同一でないが、殆ど裸體の狀態で、又時としては、男女とも毛織物の中央に裂目を造つて、裂目へ首を通して、両端を前後に垂れてゐるものもある。男女共に跣足が普通である。裝飾の第一に擧ぐべきは、顔料を身體に塗附ける事である。原料は植物から取つた帶黃赤色のテークといふ色料で、それを椰子の油で溶して塗る。此の風は日本國旗の下に在る他の土人間では、見ることの出來ないものである。

耳に孔をあけて飾をつけるのも一般の風習である。此

上膊（うで）。

嗜好品（すきこのむもの）。

の耳飾は南洋に限らず、アイヌ、オロッコ、ニグブン、臺灣の生蕃に於ても見受ける。たゞ南洋の土人に於ては、其の耳飾が大きく、且數の多い點に於て他に異なつてゐる。又入墨もする。其の外、南洋土人に特有の風は傷飾（きずかざり）である。傷飾は上膊、胸部にも多少施す。それから首へも一種の飾をつける者もあるが、場所によつてはつけぬ者もある。腕環も用ひるが、其の材料は普通鼈甲（べっこう）或は貝である。

頭髮は男女とも長く伸ばし、後で束ねてゐるのもあれば、其の儘長く垂してゐるのもある。男は飾として木、竹などで造つた細長い櫛をさし、歐化したものには髮を斬つてゐるのもある。

南洋土人の食物として最も重なものは椰子の實、麵包の木の實、芋の類、魚類、一種の酒、其の外に嗜好品として男女老幼の區別なく、皆椰子を嚙（か）む風がある。

民庶

準則

情意

道心

三二　諺と道德

諺は廣く一般民庶の間に行はるゝ一種の格言にして、常人は之を準則として、善惡理否を判じ、進退動止を決する等、其の勢力著大、世人の行爲を指導し、情意を左右すること多し。「鷹は死すとも穗は摘まず。」「武士は食はねど高楊枝。」の如き、武士道の精神を發揮し、國民の廉耻心を養成したる功頗る大なり。衣食の爲に動もすれば道心を失ひ、卑劣の情を發するに際し、此の諺に鑑みて自ら耻ぢ、過なきを得たる類、蓋し少からざるべし。而して諺の敎ふる所は、利害得失を計較

直前邁往

意料外

(一)Wander.獨逸の人。獨逸俚諺辭典五冊を作る。(西暦一八〇三―一八七九)

し、自己を中心とし、危險を避け、失敗に陷らざるやう、警戒を與ふるもの多くして、善に向つて直前邁往の意氣を皷舞する類は割合に少く、禍福の常なく、希望の實現し難く、人智の不完全にして、世事の意料外なること多きを說きて、人の注意を促す類、多數を占むるに似たり。

金錢の出入、用途、利弊等は吾人が日常の生活と密接なる關係あるを以て、各國共に此の類の諺に富み、ワンデル(一)は金錢に關する俚諺を採錄すること、千六百餘に上れり。概して節儉力行を奬勵して、「塵積りて山をなし」、「雀の巢もくふにたまる」の理を敎へ、「稼ぐに追ひつく貧乏なき」を唱說して、「湯水の如く財を使ふ」愚を戒むれども、ひたすら蓄財に耽りて吝

指摘

陰德陽報

嗇に陷る弊を指摘して、「金の番人」となり、「寶のもち腐り」となり、「小利大損」を招き、「一文吝みの百失ひ」たるを戒む。又一朝にして金を得んとする者の不正の手段を用ふるに至り易きを戒めて、「一年の內に富まんとする者は半年の內に刑せらる」といひ、「財悖りて入るものは又悖りて出で」、「惡錢の身につかざる」をいふもの頗る多し。支那の「空裏得來空裏去。」獨逸の「得たるが如く失ふ。」及び「不義の一錢は正義の一兩を滅す。」西班牙の「人の物は主を戀ふ。」皆これなり。陰德あれば陽報あり、積善の家には餘慶ある」意を語りては、「門の外より施せば窓の中へ戻つて來る。」(英)といひ、「慾に頂なく、足ることを知らずして終に身を滅すに至る」べきを諭して、「慾の鵜股さける。」と

清涼劑　(Upalmnd.)の古典。教訓の義。

防腐劑

濫與

金を積みて北斗を支ふ　冥途

いひ、「貪慾は袋を破る。」といふ。

「金もち金をつかはず。」庫中徒らに菌を生ぜしめ、唾壺と汚穢を爭ふ者の爲に一服の清涼劑たるべきは、タルマッド(二)の「施與は富人の鹽。」といへる一語なり。空しく蓄積して世用をなさず、財を腐らせ、併せて身を腐らす者にありて、施與慈善は絶好の防腐劑たらずんばあらず。諺はかくの如く施與分財を勸告すると共に、其の方法について周到なる注意を忘れず、「大風に灰を撒き、」「唐へ投金、」「淵へ鹽を投ずる」が如き無謀の慈善濫與を警戒して、與ふる者、受くる者、共に中庸を得べきを教へて曰く、「手から蒔いて袋から蒔くな。」「明日もやれる程今日もやれ。」と、「金を積みて北斗を支ふとも、冥途のみやげ

鞭撻

成敗利鈍

とならず、」「財貨も亦無常の敵を如何ともする能はざる」を説いて、伊太利には「壽衣にかくしなし。」露西亞には「黄金も天に飛ぶべき翼なし。」といへり。

財産、地位、名望等すべて自己の利益となるべきものについて、自ら力めずして妄りに他を羨み、徒らに「隣の寶を數へ、」「牡丹餅の棚より落下する」を望み、「天の落つるを待つて雲雀を捕へんとする」が如き卑屈なる惰心を鞭撻し、獨立自尊、克己、忍耐等の諸德を皷吹する男らしき諺少しとせず。「男は裸百貫」なり。自ら奮つて自家の天地を開拓すべし。「成敗利鈍は天なり、」「世は七轉び八起き」なり。「男の心と大黒柱は太い上にも太かれ。」「當つて碎くる」覺悟なかるべからず。「樂は苦の種、苦

異口同音

俯仰天地に愧ぢず

は樂の種。「不」受「苦中苦」、「難」爲「人上人」。の如き、いづれも異口同音、盛に黽勉努力の德を敎ふるにあらずや。稼ぐに貧乏追ひつかず。蜂蜜々々と連呼するのみにては、蜂蜜は口中に來らず。「神は自ら助くる者を助く」。怠け者の頭には神宿らず。汝の務むべきを務めて、然る後其の結果を天に委ねよ。自ら助けずして、神の助を呼ぶの權利なし。希臘の古諺にいはずや、「神を祈らば自身も働け」と。

「我が物食へば竈將軍」なり。我が汗に食ひ、我が家に居る、俯仰天地に愧ぢず、誰か得て我を左右するものぞ。われに口あり。人に囑して吹かしむる勿れ。」とは、自ら事を處するの快を敎ふる西班牙の諺なり。

瑣々

一片耿々の心

(三)孟子の語。

一敗を以て志を挫くべからず。財を失ふとも憂ふるに足らず。地位名望を失ふも尙可なり、意氣精神を失ふに至りては救ふべからず。帽を失ふとも、頭を失はず。」指環を失ふとも指は存せり。物を失ふも、我を失はざれ。指環は再び得べし。指は改め作るべからず。帽子なきも頭は頭なり。指環なきも指は指なり。瑣々たる外觀、何ぞ我を煩はさん。時不可にして一旦下位に居るも、一片耿々の心猶存するものあらば、再び靑雲の上にあるべきなり。若き人々よ、自ら賴んで事を成すべし。然れども、「(三)鎡基ありといへども、時を待つにはかず、」「人事を盡して、徐に天命を待つ」の度量なかるべからず。果報は寢て待て。」とは正に此の意なり。自ら爲すべき所を爲して、多く

天賚

期待せざる者は、おのづから神寵を得て、天賚を得べし。泰西の古諺にこれあり、「睡者の網に魚たまる。」と。

薫猶相混ず

俚諺には薫蕕相混じ、正に相反するあり。されば俚諺の訓戒を信條とせんとする者は、其の一方の教訓に執着して、一切を顧ざるが如き愚に陷ることなく、相反せる諺をも參酌して、所謂「太鼓をうてば鐘がはづれる」の陋を演ずる勿れ。又

信條

參酌

自暴自棄

「毒食はゞ皿まで。」「濡れぬさきこそ露をも厭へ。」の如き、自暴自棄の惡諺を以て、己の罪過を辯護せんとするが如きことなく、能く其の佳良なるものを奉じて、遷善進德の具となすべし。同一の俚諺も、其の解釋應用の如何によりて、毒となり、藥となること、猶同一草木の花中より、「蜂は蜜を吸ひ、蜘蛛は毒

遷善進德

を取り、」「牛は水を飲んで乳となし、蛇は水を飲んで毒となす」が如し。戒めざるべけんや。

——藤井乙男、諺と道德による——

三三　日本の婦人と歐米の婦人

幣原坦

我が國の婦人は、歐米に於て頗る評判が良い。然らば、歐米人はいかなる點で、日本婦人に感服するかといふに、第一「きもの」といふ言葉が彼等の流行語となつてゐるのを見ても、我が國の婦人の服裝が、己に一種の美感を與へてゐることが分る。更に日本婦人の、己を捨てゝ家の爲に盡し、男子の爲

漠然

に盡す所の犧牲的精神に至つては、特に歐米人の感動を惹くものと見えて、近頃彼の地に於て演ぜられる日本婦人に關する演劇は、多く此の犧牲的方面をあらはして居る。これ歐米に於ても、動もすれば婦人らしき婦人を要求する聲が起らうとするに際して、日本婦人は即ち此の要求に合するが如き觀があるからではあるまいか。

併し彼等の我が婦人について感服する點は、まだ頗る漠然たるもので、婦德の詳細なる點には考へ及んで居らぬ。一體我が國に於て婦德として最も重く考へられたのは、此の婦人らしき婦人といふことである。即ち我が國の婦人は歐米の婦人に比して貞淑である、溫良である。そして少しも勤

愚痴

社交

勞を厭はない。大抵の家庭に於ては主婦は自ら拭掃除をし、子供の世話、洗濯に至るまで、一々之を行ふのである。

さて又我々が歐米の婦人を見て羨ましく思ふのは、まづ體格の强健な事である。歐米の婦人は姿勢からしてしやんとして居て、行動も敏活であるし、氣分もしつかりして居るやうに見える。又教育の程度の高い故か、大體に於て判斷力にも富んで居る。中には隨分愚痴な婦人も居るけれども、平均して見れば、我が國の婦人よりも物判りが早くて、はつきりしてゐる。但し一面には、歐米では社交が盛である爲に、婦人社會に華美奢侈の風が行はれ易い。だが又、其の家庭の內情をよく窺つて見ると、大いに儉約をつとめて居ることが

分る。或英國婦人は「交通機關の發達と共に外國の贅澤品が盛に英國に入込むから、之を防ぐ爲には、成るべく自國の品で間に合せるやうにしようといふ申合せをして居る。」といふ話をして居た。

巴里の婦人は隨分贅澤をして、身體の裝飾に憂き身を窶して居るやうにいはれてゐるが、實際それは或一部の人、又は外觀上のみの事であつて、普通の家庭にあつては、なかなか儉約である。冬物を仕立直して夏着にするとか、或は同じ着物を染直して着るが如きことは、我が國と同じであつて、殊に田舍の家庭に至つては、極めて儉約なものである。普佛戰爭で莫大な償金を獨逸から要求されたにもかゝはらず、

憂き身を窶す

(一)西紀一八七〇年(明治三年)西班牙の王位繼承問題に關して佛蘭西と獨逸と戰ふ。

立ちどころに之を拂ひ得た所以は、こゝにあると頷かれる。

獨逸の婦人が平生絹物を着ないとか、十四金以上の物を帶びないとかいふことは、誰も知つてゐる通りである。自分が嘗て或大學教授の家に招待されて行つた時なども、夫人が自ら燈火をつけたり、いろ〳〵の世話をして居られるのを見て、何となく我が國の家庭を見るやうな快感が起つた。そして何處までも質朴健全といふ理想を失はないやうにしなければ、一國の富强は圖り難いものだといふことを、今更の如くに感じた。

歐米に於ける婦人の位置が、我が國に於けるよりも一般に高いことは、言を待たざる所であるが、これは婦人の智能

が概して高い故でもあらう。現に歐米の婦人は男子よりも知識の發達に往々便利な事情がある。何故かといふと、學校は男女共に同じ程度の處を卒業するにしても、卒業後、男子は外國へ行くとか、職業に從事するとか、とにかく生計を營むのであるけれども、女子は男子のやうに遽に外國へ行く事も出來ず、また直ちに荒い仕事に從事することも出來ず、家庭に居殘つては餘暇に書物を讀む、即ち讀書の習慣は學校を出た後も、依然として續いて行くから、自然智能が發達するやうになるのである。

次に職業問題に就いて考へて見ると、歐米の婦人は隨分獨立生活をしなければならぬところから、それ相應の職業

標的

家庭の副業

を求める必要がある。女子の職業教育は、こゝに於て一つの問題となるのである。我が國の現狀では、婦人が獨立生活を餘儀なくされるまでにはなつて居ない。そこで女子教育の標的は良妻賢母といふことになつて居るので、今日のところ、主として家庭の主婦たる素養を必要とするのである。併し其の家政を整理するについては、家庭の副業といふ事を一應心得て置く必要があると思ふ。我が國で早くから奬勵された養蠶なども、副業の一つである。爪哇の更紗製造及び竹細工なども、輕々に看過してはならぬ。歐米で見ても、婦人が家庭で作る品物はなか〳〵少くない。佛國の上流社會の家庭では、稍娛樂的に刺繡、繪畫を試みるやうであるが、中流

社會の家庭では、眞面目に刺繍や編物をする。又中流社會でも獨身の婦人になると、教師、辯護士、醫師など殆ど男子と異ならざる職業に從事して居る。一層餘裕のない社會に至れば、刺繍、編物は勿論、仕立物、繕物、洗濯、造花、婦人帽製造など、生計の補になることは何でもするが、此等の女子の所得は、仕事の種類と巧拙とに依つて一樣ではないけれども、先づ一日に一フラン半から三フラン位まで、即ち平均二フラン餘の收入を得るのである。

鄭重

主婦が料理をするのは普通であるのみならず、鄭重にすべき客には、特に主婦の手料理を用ひるのが禮である。東郷大將が先般米國に回航された砌、一夕ルーズベルト氏に招待された。其の時の御馳走などは、誠に簡單なものであつたが、何れもルーズベルト夫人の手料理であつたといふことである。

——世界小觀——

女子國文卷六終

通用字及び正字對照表

（茲に其の主なるもののみを擧ぐ。本書には主として通用字を用ひたり。）

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
両	兩	剪	翦	塲	場	戟	戟	楕	橢
仞	仞	劔（劒）	劍	塚	冢	戲	戲	欵	款
佞	佞	効	效	墻	牆	拘	拘	殲	殲
免	免	勺	勺	寃	冤	拿	拏	殺	殺
兎	兎	卑	卑	寇	寇	抜	拔	毒	毒
円	圓	即	卽	寶	寶	挿	插	氷	冰
冒	冒	厨	廚	尅	剋	捏	捏	涅	涅
決	決	厩（廐）	廐	帽	帽	攜（携）	攜	潤	閏
況	況	双	雙	并	幷	整	整	潛	潛
準（準）	準	収	收	廩	廩	既	既	焔	焰
涼	涼	叙（敘）	敘	廻（迴）	廻	昂	昂	熔	鎔
減	減	唇	脣	往	往	晋	晉	猿	猿
凡	凡	器	器	恒	恆	央	央	猪	豬
函	函	噴	噴	憩	憩	朽	朽	猫	貓
回	回	噴	噴	憩	憩	桿	杆	献	獻
及	刃	皿	回	懺	懺	桿	杆	頴	穎

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
獵	獵	顧	顧	纏	纏	臥	臥	裡	裏
玄	玄	秘	祕	罰	罰	致	致	褒	褒
瑣	瑣	窃	竊	群	羣	皐	皐	覽	覽
畫（畫）	畫	竪	豎	羹	羹	舗	鋪	霸	霸
留	留	簒	纂	耻	恥	舘	館	解	解
略	略	簒	纂	聟（婿）	壻	艶	艷	記	記
痴	癡	簒	纂	胆	膽	莽	莽	識	識
毒	毒	紀	紀	腸	腸	蛍	螢	象	象
毒	毒	穀	穀	脈	脈	萌	萌	讐	讐
毒	毒	粘	黏	膝	膝	衛	衛	豹	豹
毒	毒	簽	籤	膝	膝	妍	妍	峯	峰
毒	毒	簽	籤	膝	膝	妍	妍	微	微
毒	毒	簽	籤	膝	膝	村	邨		

通用	正	通用	正	通用	正	通用	正	通用	正
賓	賓	間	間	開	開	陷	陷	隔	隔
贊	贊	陷	陷	隙	隙	隙	隙	隷（隸）	隷
贊	贊	陷	陷	軟	輭	輕	輕	駄	駄
贊	贊	陷	陷	鄰	隣	針	針	鍼	鍼
贊	贊	陷	陷	鐵（鐵）	鐵	釜	釜	麺	麺
贊	贊	陷	陷	鐵	鐵	鬱	鬱	鬪	鬪
贊	贊	陷	陷	鎖	鎖	鬱	鬱	鶴	鶴

同字表（いづれにてもよし）

万	萬	並（竝）	竝	冨	富	嚮	叶	協	協
冊	冊	亡	亾	冲	沖	坂	阪	婦	婦
姉	姉	嶋	島	忘	忘	恣	恣	恤	恤
斬	斬	庵	菴	慍	慍	慙	慙	敬	敬
敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬
敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬
敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬
敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬
敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬	敬

柿	枾	毘	毗	砧	碪	網	綱
案	桉	汙	汚	稿	藁	総	總
基	碁	温	溫	競	競	綵	彩
棕	椶	烟	煙	筍	笋	組	組
楫	楫	無	无	笄	笄	羈	羈
槁	藁	狢	貉	椶	船	訛	譌
概	槩	狸	狸	糾	糾	艪	船	譁	嘩	雁	鴈
朴	樸	睹	覩	紆	紆	花	華	踪	蹤	駈	驅

荒	荒	蹋	蹧	但	但	僭	僭
蔭	蔭	遁	遯	鉾	矛	冑	冑
陰	陰	鶏	鷄	協	協	刺	刺
鏽	銹	鏞	鏞	臺	台	後	后
商	商						

本來ハ異字ナレドモ同字若シクハ略字トシテ往々混用セラル、モノ。其ノ中＊標ヲ附シタル文字ニ限リ、慣用ニ從ヒテ强ヒテ區別スルニ及バズ。

＊瓦	亘	＊体	體

ワタル。「連亘」

桓ニ同ジ。

笨ニ同ジ。アラシ、麁、粗。

カラダ。

但馬。

ダトシ、ダト。「但馬」

少タナシ、拙劣。

ミダリガハシ、猥。

身分ヲ越エテオゴル。「僭越」

カブト、兜。「甲冑」

ヨツギ、嫡子。又子孫。「冑裔」

カナフ、叶。

オビヤカス、脅。

サス。「刺殺。刺客。名刺」

モトル、ソムク、乖戻。「亞刺比亞」

星ノ名。又敬意ヲ表スル爲ニ語ノ上ニ添フ。「台覽。台臨」

ウテナ、ダイ。

ノチ、アト、ウシロ、シリヘ、オクル。

キミ。「皇后」

アキナヒ。

モト、本。

＊壺	壺	＊姬	姬	＊托	託	＊担	擔
＊攺	改	＊槍	鎗	欠	缺	＊糸	＊絲

ツボ。

ミチ、宮中ノミチ。

ツ、シム。

ヒメ。

拓ニ同ジ。オス、ヒラク。

ヨル、タノム、ユダヌ、カコツク。

ハラフ。又アグ。

ニナフ、カツグ。

鬼ヲ追フトイフ星ノ神。

アラタム。

ヤリ。

鐘ニ同ジ。鐘ノ聲ノ形容。

アクビ。「欠伸」

カク。「缺席」

ホソイト、細絲。

イト。

＊羨	羨	＊虫	蟲	＊詫	詫	＊詔	詔
＊証	證	＊豐	豐	＊迠	迠	＊選	選
＊撰							

支那ノ地名。

ウラヤム。

魚介類の總稱。又マムシ。

シム。

ワビ、ワブ。「詫狀」

詐ニ同ジ。アザムク。

ヘツラフ。

ウタガフ、疑。

アカシ、シルシ。「證明」

イサム、諫。

禮ノ古字。

ユタカ。

マデ。

ユク、行。

エラブ。(ヨリトル)

エラブ。(書物ヲ編纂ス)

郤（ダキ）　ヒマ、隙。
卻（キヤク）　シリゾク。「退卻」
鍛（タン）　キタノ、「鍛錬」
鍛（カ）　シコロ、鉄。

宛字（左の如き字は假名を使用するをよしとす）

おぼつかなし　覺束なし
かひ（詮の意の場合）　甲斐
きつと　屹度
さすが　流石、遉
しまふ　仕舞ふ
だけ　丈
だめ　駄目
ちやうど　丁度
ちよつと　一寸、鳥渡
でたらめ　出鱈目
とう〳〵　到頭
とかく　兎角、左右
とて、とても　迚
とにかく　兎に角
なか〳〵　中々、却々
ふるまひ　振舞
はかなし　果敢なし
ほんたう　本當
むだ　無駄
むづかし　六ケし
やたら　矢鱈
やはり　矢張

附錄　終

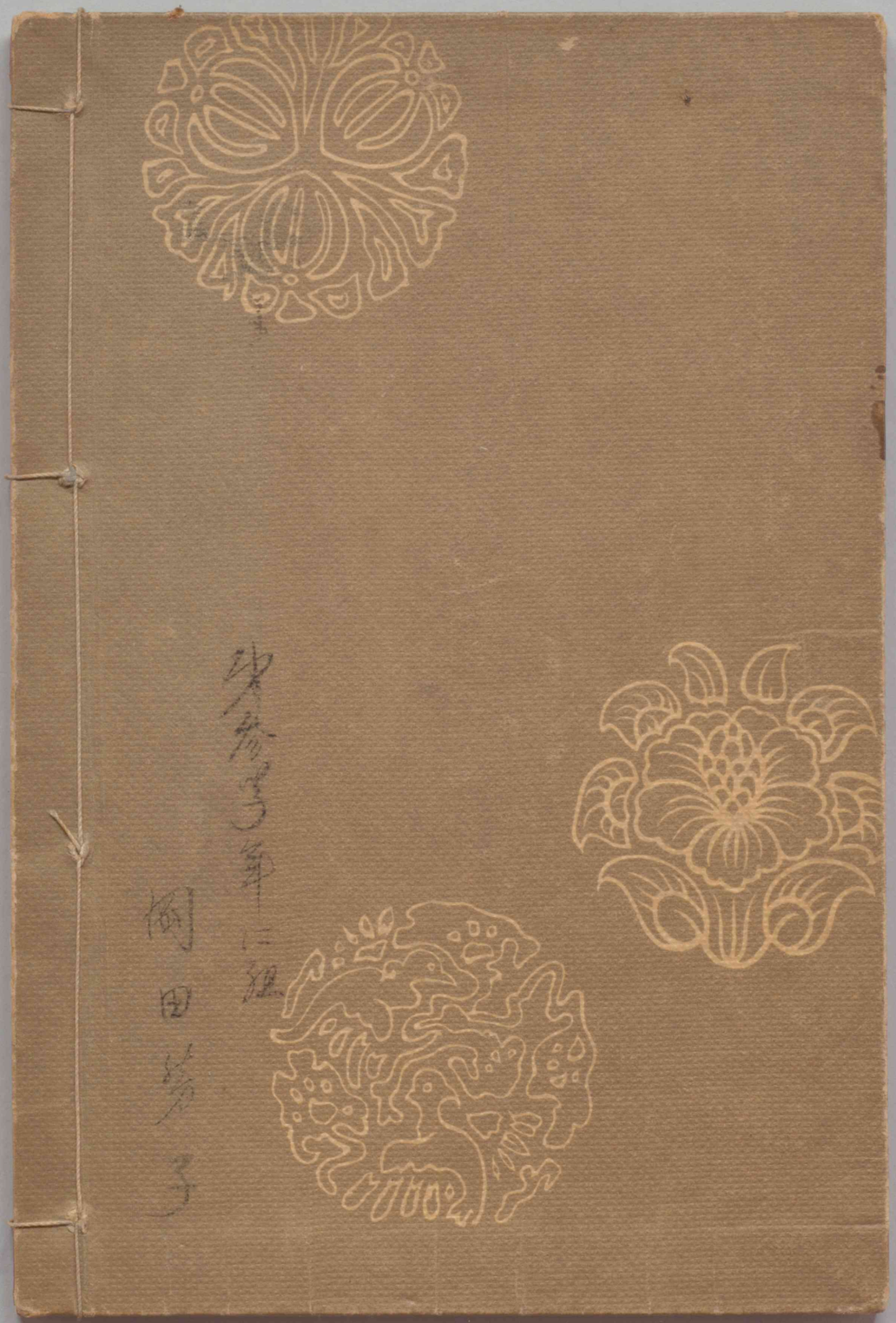
大正六年十月廿七日印刷
大正六年十月三十日發行
大正七年一月十六日訂正再版印刷
大正七年一月十九日訂正再版發行

（女子國文）
定價　全八冊　各金三拾四錢
大正八年度臨時定價　金四拾八錢

著者　芳賀矢一
發行兼印刷者　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
代表者　合資會社冨山房社長　坂本嘉治馬
印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

著作權所有

發行所　東京市神田區裏神保町九番地　合資會社　冨山房
長電話神田三〇一四番、三七六〇番
振替口座東京五〇一


岡田第3